

二〇二一年度

## 第二回 泥流地帯作文コンクール作品集

募集期間 二〇二一年六月～十月

応募資格 特になし

応募作品数 38 作品(うち10 作品は短文投稿の部)

### △選考委員▽

三浦綾子記念文学館 館長 田中 綾

上富良野町教育委員会 教育長 服部 久和

上富良野町郷土をさぐる会 会長 中村 有秀

上富良野町図書館ふれんど認定ゴールドミウラー 白井 宏子

(選考委員長)『泥流地帯』映画化を進める会 会長 青野 範子

主権  
協力

『泥流地帯』映画化を進める会  
三浦綾子記念文学館  
上富良野町教育委員会



# 目次

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| △はじめに▽                         | 1  |
| △優秀作品選考審査結果▽                   | 2  |
| △一般の部／町民一般の部▽                  |    |
| ■ 出発前夜／(P.N)ニモ                 | 4  |
| ■ 泥流地帯・続泥流地帯を読んで／石庫要           | 13 |
| ■ ふるさと／(P.N)もち                 | 14 |
| ■ 天知る 地知る 己知る／(P.N)カオリン        | 15 |
| ■ 真面目に生きるとは？／(P.N)和泉蜻蛉         | 16 |
| ■ 『善因善果・悪因悪果』の真実とは／小玉加余子       | 17 |
| ■ 熱海と私と泥流地帯／(P.N)秋葉さし          | 19 |
| ■ もしも／(P.N)Queenlily           | 20 |
| ■ 月下のひとりごと／(P.N)青葉白            | 21 |
| ■ 香也子の部屋／(P.N)神楽岡マイ            | 24 |
| ■ 拓一あんちゃんが後夜祭にやってきた！／(P.N)ミツバチ | 26 |
| ■ 泥流地帯1984 ― 報い ―／(P.N)よもや四方屋  | 31 |
| ■ いつも心に拓一をpart2／(P.N)鵜飼鮎子      | 38 |
| ■ 三浦綾子著『泥流地帯』に出会えて             |    |
| く上富良野は奇跡の地く／松野富子               | 39 |
| ■ 今、「泥流地帯(正・続)」を読み直し思うこと       |    |
| ／(P.N)福島野百合                    | 40 |
| ■ 『泥流地帯』と心象の故郷／根本彩             | 41 |

|                          |    |
|--------------------------|----|
| △児童生徒の部▽                 |    |
| ■ 泥流地帯への思い／(P.N)フルーツ娘    | 44 |
| ■ 泥流地帯の感想／(P.N)ずんだ餅      | 44 |
| ■ 泥流地帯についての感想／安藤玲梨       | 45 |
| ■ 泥流地帯を読んで／広瀬永真          | 45 |
| ■ 泥流地帯の感想／太田朋香           | 46 |
| ■ 泥流地帯と私と母／(P.N)レモン      | 47 |
| ■ 泥流地帯の感想／北條愛夢           | 47 |
| ■ 泥流地帯を読んだ感想文／(P.N)高校生01 | 48 |
| ■ 泥流地帯を読んで／山田大和          | 48 |
| ■ 泥流地帯を読んで／(P.N)高校生02    | 49 |
| ■ 泥流地帯を読んでみて／村上凜         | 49 |
| ■ もしもの世界／(P.N)山羊鎌足       | 50 |
| △Twitterの部▽              |    |
| △資料編 史実としての『泥流地帯』▽       | 54 |

■はじめに

『泥流地帯』作文コンクールは新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた昨年(二〇二〇年)、自宅で過ごす機会が多くなったことを機に三浦文学、特に現在上富良野町が実写映画化に取り組んでいる『泥流地帯』『続泥流地帯』の原作小説を多くの人に読んでいただくことに期待を込めて企画がスタートしました。

児童生徒の皆さんはもちろん、「大人の作文」も楽しんでいただくため、対象年齢や文字数、内容に関する制約を一切取り払い何でもアリの募集を行った結果、予想を大きく上回る数のご応募をいただき、さらに第二回の開催を望む声を多くお寄せいただいたことから、この度第二回コンクールの開催が実現し、短文投稿の部を含め三十八編のご応募をいただいたところです。

昨年同様ご応募作品も三浦文学愛、泥流地帯愛にあふれ、さまざまな視点から深く、いねいに読み解かれたものばかり。読者同士で互いの理解を深めること、また『泥流地帯』を未読の方にも本を手にとる大きなきっかけになるのではないかと、との期待から、ご応募いただいた皆様のご理解とご協力のもと、作品集発刊のはこびとなりました。

実写映画化を間近に控えた今、本作品集が原作小説『泥流地帯』『続泥流地帯』をお読みいただく、または再読いただく機会となることを心から願っています。

■実写映画化プロジェクト

小説『泥流地帯』『続泥流地帯』の舞台となった上富良野町では現在、実写映画化のプロジェクトとして官民連携した取り組みが進められています。

実写版『泥流地帯』は民間事業者による全国公開の興行作品として製作される一方で、ふるさと納税により企業・個人から広く資金を募っています。

映画本編エンドロールにご寄附いただいた皆様のお名前を掲載するほか、エキストラ出演やイベント参加特典などをご用意しています。皆さんも映画作りに参画してみませんか？

みんな、撮る

三浦綾子

# 泥流地帯

実写映画化プロジェクト

みんな、撮る

—百年先のために—  
青白い炎が灯る。死の土に  
再び眠る。つた上富良野の開拓者  
先人が譲り遺してくれた  
美しく豊かな故郷の物語を  
全国のスクリーンへ—



北海道 上富良野町 / 株式会社Zipang / 三浦綾子記念文学館

「泥流地帯」映画化を進める会 / ロケサポートかみふらの  
〒0167-45-5994 deiryu@movie-kanifurano.com



ふるさと納税で  
もらえる！  
泥流地帯文庫型  
スマホケース  
※各機種対応



公式Twitterで  
情報発信中



@twitter



映画化  
プロジェクト  
webページ

## 優秀作品選考結果



最優秀賞 出発前夜 (P.N) ニモ

【選評】▽小説では福子の内面は深く描かれずいつも受け身の存在。本作では福子が自身の「空っぽ」さに気づき、自意識を持つて新たに立ち上がるさまが丁寧に描かれ説得力。節子の思慮深さも伝わり外伝として完成度高い▽節子と福子が互いを思いやり相手の境遇への表面的な理解に終わらず内面への理解を深め、人としての矜持、生きる意味を取り戻していく心の動きの表現巧み▽心理描写巧み。自己犠牲、葛藤の後、人間(個)の尊厳をとり戻す様が描かれ、果てには未来への希望が感じられる▽一夜だけの二人の話し合いかと思う程内容が濃密。佐野文子氏・沼崎医師等歴史的な背景を的確に捉えている。最後の白いハンカチと汽笛が心に響く

優秀賞 熱海と私と泥流地帯 (P.N) 秋葉さし

【選評】▽現在と『泥流地帯』とを関連づけ自分ごととして災害を考察した点に読み応え。被災にとどまらず復興の物語も視野に入れ生活者にエール。文章も端正▽生活と関わりのある場所での自然災害と人々の被災に触れつつ登場人物の思いや原作に描かれる人間の生き方について力強く訴えるなかに優しさが表れている▽現実の自然災害と重ねて描かれ災害や復興へ対する真摯な心情がこもる作品。困難な状況下での生き方に輝きを見出す箇所の比喩に共感

優秀賞 『泥流地帯』と心象の故郷 根本彩

【選評】▽『泥流地帯』のメッセージ性を的確に受けとめ「公正世界仮説」にも言及したことで思索が一步深まっている。両親と「私」という二世代の享受のしかたも具体的に多くの世代が読み継ぐことの可能性を示唆する優れた作文▽誰にも故郷がある。自分の育った地や両親が苦勞を積み重ねた開拓の足跡、それらの思いを「泥流地帯」の中で心象として綴られている

佳作 ふるさと (P.N) もち

【選評】▽人間は自然の営みや避けようのない災害と共生していかなければならない中で人間らしく生きる難しさと素晴らしさが描かれている。未来は選択することができるといふ熱い想いが伝わる作品

佳作 香也子の部屋 (P.N) 神楽岡 マイ

【選評】▽有名な長寿番組をモチーフに泥流地帯と続泥流地帯について読者に楽しくわかりやすく魅力を伝える工夫にあふれた作品

佳作 月下のひとりごと (P.N) 青葉 白

【選評】▽月明り・鈴虫・稲田の情景と福子の微妙な心の葛藤と拓一の心遣いの表現が良く作者の意図が肌で感じられた

## 町民一般の部

最優秀賞 『善因善果・悪因悪果』の真実とは

小玉加余子

【選評】▽物語の大きなテーマである善因善果、悪因悪果を深く考察しながら試練に立ち向かった開拓者への敬意と教訓を受けとめ更に先へ引き継ぐ気持ちが強く表れている、上富良野町民ならではの作品

## 児童生徒の部

最優秀賞 泥流地帯の感想

太田 朋香(上富良野高)

【選評】▽登場人物の年齢をふまえ「学校に通う」ことの意義、大切さを再認識した点が美点。授業や朗読劇の体験が自身の成長につながっている点も好ましい▽授業で登場人物になりきって演じたことから学校という視点で登場人物と自分を比較し学校の大切さに気づいている。読むだけでなく演じ体験することでよりリアルな物語として感じられていることがよくわかる作品

優秀賞 泥流地帯を読んで

高校生02(上富良野高)

【選評】▽『泥流地帯』を「防災教育」とつなげて読み深め「自分ごと」として考えているさまが伝わる。具体的な対応に言及しているところも高校生らしい

優秀賞 泥流地帯を読んで

広瀬 永真(上富良野高)

【選評】▽大正時代と現代の時代差をふまえつつ、「キャラクター」の存在感に着目した点が光っている。新たな読み方を読者一人一人に呼びかけてまとめたことも評価

## ツイッターの部

最優秀賞 ばちゃん @basaaan\_mini

【選評】▽正統にまたがって紐解かれる重要なテーマと読者が得る大きな教訓が見事にまとまった百四十文字

## 一般の部

## 出発前夜

(ペンネーム) ニモ

『続泥流地帯』の最後、節子と福子が汽車に乗るシーンの前の晩の出来事を想像して創作しました。あの晩に何が起きて福子が汽車に乗るに至ったのか、妄想を最大限膨らませています。登場人物の気持ちや行動はすべて個人の想像に過ぎません。)

夜も更けてきた頃だった。人影ひとつなかった市街の通りに馬が一頭入ってきて人を一人深雪楼の前で降ろし、もと来た道を戻っていった。曾山福子は膝を抱えて窓辺にもたれかかり、窓の向こうに動く馬の影を見つめていた。馬が去ってしまうと市街はまた人っ子ひとりいなくなってしまう。自分のいるこの深雪楼の屋内と違い、外はきつとしんと静まっているに違いないと福子は思った。

「福ちゃん」

名前を呼ばれて福子の体が跳ねた。深城節子が部屋の入り口に立っている。

「待たせてごめんね。わたしの部屋に来て、そこで話しましょう」

節子に呼ばれるままに電灯の煌々とぎらつく深雪楼をあとにして、福子は深城の住宅に入った。福子の体調は悪くなかったが、悪いと言って仕事は休みにしてもらっている。この瞬間にも仲間たちは自分の分まで客を取り、つらい思いをしながらも生きるために、あるいは親の借金を返すために働いているのだと思うと、福子は心が咎めた。

節子の部屋に入り、福子は節子と向かい合って座った。先ほども二人で話したばかりで、そして今からも同じ話をするのだとわかつてはいるが、福子は気持ちが落ちつかなかった。

何度も家出をしているこの節子は、悪びれもせず何度でもこの家に戻ってくる。この週末に戻ってきたのは、福子の身請の話が進みそうになっているからという理由でだ。話が決まる前に福子を説得し、深雪楼から連れ出すために旭川から汽車でやって来たのだ。福子はそんな節子に申し訳ないという気持ちと、放っておい

てほしいという気持ちが半分半分だった。

「福ちゃん」

節子は真剣な目で福子に語りかけた。

「拓一さんに会ってきたわ。拓一さんはね、あなたと結婚したいという気持ちに変わりはないと言っていたわ。それから、いざとなったら沼崎先生からお金を借りようと思ってることや、福ちゃんが沼崎先生のところへ行くというのはどうかと言ったら、拓一さんも耕作さんも、ほっとしている様子だった。もう壁はほとんどなくなつたわ、福ちゃん、あとはね」

節子は言葉を切って息を整えた。

「あなたが決めてくれたら、それでお願いします」

福子にとって、節子は同年代の他のどんな女性とも違う存在だった。はじめから福子ら深雪楼に雇われた女性たちに親切で、父である深城鎌治にはつきり物を言った。福子の幼馴染の石村耕作に抱いている好意を憚ることなく口に、だからと言って耕作と仲の良い福子を妬むこともしなかった。自分とは正反対のはきはきとした性格の節子だったが、福子はやがて好きになった。

その節子は去年、耕作の兄である石村拓一



が足に怪我をして入院したとき、拓一のいる病室で福子に、深雪楼から逃げるよう進言した。福子が父親の借金をいくら抱えていようと、それが理由で福子を拘束することは誰にもできない法律になっているから、と。また福子と拓一のお互いへの想いをその場で聞き出し、二人に結婚するよう勧めた。結婚してしまえば福子は深雪楼で働くことはもうできないのだ、と。しかし福子にとってそれは思いがけないことで、すぐに受け入れることはできなかった。いくら法律がどうだと言われても、福子にとっては父の遺した大きな借金と、恐ろしい声でとなる深城こそがずっと法だった。深雪楼を逃げ出せて好きな人と結婚できたとしても、それらは福子を追いかけてくるだろう。そして福子が宝物のように思っている優しい人たちにまで、魔の手を伸ばして苦しめるに違いない。そうなるくらいなら一生を深雪楼で終えるほうがまだましだと福子は思った。病室で拓一がかけてくれた優しい言葉が涙が出るほど嬉しくて、一度は結婚を決意したものの、福子は今では拓一と一緒にになりたいとは考えていなかった。自分との結婚が拓一を不幸せにはしても、幸せにするとはやはりどうしても思えないのだ。

「そんな、福ちゃん……」

福子の意思を聞いて節子はがっくりと肩を落とした。

「節子さん、節子さんが深雪楼の父さんに去年わたしを逃すという話をしてくれたから、深雪楼の父さんは慌ててわたしの身請先を探し始めたの。わたしはそれがありがたいわ。だって身請されればもうここで働かなくてよくなくなるんだもの」

「父は自分のことしか考えてないわ。わたしに福ちゃんを逃がされる前に、福ちゃんを利用して一銭でも多く自分の懐に入れただけなのよ。それに福ちゃん、わたしの母がどんな目にあったか知ってるでしょ？身請されて幸せになるとはわたしは思えないわ」

「そうね、だけど……深雪楼にずっといるよりはいいわ。わたしがそこへ行けば、全部が丸く収まるんじゃないかと、そう思うのよ」

福子は目を伏せて膝においた手の指を動かした。声が小さくなっていた。

「ここであたしが逃げてしまうと、いろんな人が、つらい思いをするような気がして……」

「福ちゃん……」

節子は天を仰いだ。目の前の福子は、もう七

年もの間、節子では想像がつかないほどつらい思いをしてきたはずなのだ。

節子は去年、父親に向かって、福子の代わりに自分が深雪楼の女になってもいいと啖呵を切った。その気持ちに嘘はなかったが、自分が女郎屋で働く姿を想像した時には体が震えた。男性から品物のように眺めまわされ体を触られる。想像の中で節子は嫌悪と恐怖だけでなく、虚しさを感じた。心が壊れていくような強い虚しさだった。ならば福子はもっと強い虚しさを毎日感じているはずだと、心を痛めたのだ。その福子が、いま人のことばかり思いやって逃げ出そうとしない。

節子は福子に向き直った。

「福ちゃん、あんたが本当に優しい人だってことはよくわかったわ。でもね、それだけではないでしょう」

福子の指いじりが止まった。節子は心を決めた。道はある。最後の壁はその道を歩いていくはずの福子本人だと節子は思っていた。

「福ちゃん、あんたは自分自身の人生を生き抜いていく覚悟がないんだわ。そうでしょう？」

福子の表情が凍りついたが、節子は構わず続けた。

「福ちゃんが逃げ出すことで、他のいろんな人がつらい思いをするのがいやだという気持ちには、半分は本当だと思っわ。いいえきつと半分以上ね。でも残りは、自分自身の思いに耳を傾けたり、自分がこう生きたいと願うような人生を生きたことから逃げてるのよ。だからここを出る決心がつかないんだわ」

節子がつっぱりと言い、しばらくのあいだ沈黙があった。

「だって、わたし、父さんの借金があつて……生きたいようにだなんて……」

呟くように福子と言った。

「そう、お父さんの借金っていう制約があつたからあなたはあなたの人生を奪われていたのよね。そしてわたしたちはそれをどんなに理不尽だと思つていても、状況をどうにかすることができなかったのよ。だけど今は違っわ。道があるのよ。だから福ちゃんは自分の人生を生きたために、その道を歩いていけるのよ」

節子は福子の顔を覗き込むようにして話した。

「今こそあなたはあなた自身の声に耳を貸さなきゃ。ねえ、思いを聞かせてよ……福ちゃん」

福子はぎゅつと目を閉じた。福子の瞼の裏に、

颯爽と汽車から降り立つ節子の姿がなぜか浮かんだ。

深城の家から節子が出ていった、と最初に聞いたのは三年前の五月だ。はじめ福子は、家出と言つても女学校時代の知り合いの家にでも匿つてもらつているのだらうと思つていた。どうやら違ふようで、行き先は東京のようだと言いた時、あまりのことに福子の胸は高鳴つた。では、節子さんはあの汽車にひとりで乗り——子どもの頃にみんなで走つて見に行つたあの汽車だ——石村の小母さんのいる遠い函館さえも越えて、この北海道を出たのだ！と。福子は北海道を出たいと思つたことは一度もなかった。そんなことは考えたことがなかった。それなのに、節子がたつたひとりで汽車や船を乗り継ぎ、東京の駅へ降り立つ様子を思い描き、胸が沸きたつた。すごいわ、節子さん。すごいわ。自分が家出をしたわけでもないのに、福子は快哉を叫びたいような気持ちになつたのだ。無事でいてほしいとか、いつか帰ってくるのだらうかといった心配はどこかに飛んで、福子はいつまでも節子の冒険に胸をときめかせていた。

なぜ今それを思い出すのだらうと思ひなが

ら、福子はそつと目を開けた。節子の目を見ることはできなかった。

「あのね節子さん、わたし……節子さんが今旭川で、お内儀さんと一緒に、努力してご自身の道を歩んでいらつしやるの、とてもすごいと思つてるわ」

福子は息をついて胸に手を当てた。こんなに一度に自分の気持ちを話そうとするのは初めてのことだった。

「お内儀さんと節子さんは、血のつながりはないでしょう。それなのに節子さんはお内儀さんと一緒に家を出て、落ち着き先も見つけて、今では看護婦さんの資格まで取つて……何が言いたいかというと、わたし、あなたのそんなところをとても尊敬して、だから……」

節子は福子のゆっくりとした口調に合わせて頷きながら聞いていた。

「あなたのことを噂で聞くだけでも、わたし、なんだか誇らしくて……そんな節子さんが、こうやって時間を割いて、わたしのことを考えてくれる、それだけで十分、幸せだわ。本当にもつたいないの。拓一さんにしても同じよ。拓一さんも、節子さんも、わたしのために、これ以上苦勞をしてほしくないわ。これがわたしの思



いの。本当にこれだけよ」

福子はほっと息をついた。気持ちを言えたという安心と、なぜか寂しさを感じて、福子の目から涙が一粒落ちた。自分の人生を生きる覚悟がないと言われたとき、その言葉が胸にぐざりと刺さったように感じた。福子は自分をそんなふうに顧みたことはない。だが節子の言う通りなのかもしれないと思った。自分が覚悟を持たない人間なのだとしたら、それ相応の生き方ではないと思う。節子や拓一のような覚悟のある人たちの人生に、自分のせいで影を落とすようなことだけはしたくなかった。それ以外に福子に願いはない。あるのは寂しさだけだった。

鼻を吸る音がして福子は驚いて顔を上げた。節子は顔を歪ませて涙を流していた。

「福ちゃん。わたし、わたしや父がどんなに罪深いことをしてきたか、今のを聞いてよくわかったわ。わたしたち、あなたから生きる気力さえも奪ってきたんだわ。あなたの中から、望みや願いも……」

「節子さん、そんな」

福子はおろおろと手を動かした。節子は眉をぎゅっと寄せて膝の上で拳を握りしめていた。「節子さん、わたし節子さんに親切にしても

らった覚えはたくさんあるけど、そんなことされた覚えはないわ」

「いいえ、福ちゃん。苦勞をかけたくないなんてあなたは言うけど、じゃあわたしはどうなるの。わたしが何の不自由もなく生きてこられたのは、父が雇った福ちゃんたちのおかげじゃないの。わたしたちこそあなたに苦勞をかけて生きてきたのよ。本当だったら望みを持って生きるはずだった人たちを物のように売り買いつらいことをさせて、望みや願いを持つべき大切な心を踏みつけにきたんだわ」

節子は悲しい目で福子を見た。福子はどうしていいかわからずに視線を落とした。

「でも、わたしや他のみんなには借金があるから、どうしても働かなければならなかったし……」

「お金の貸しがあるからと言って、人をまるで物のように扱っていいということでは決してないわ。他の方法で返してもらうことだって出来たはずよ。父は人の弱味につけこんで、人としてやってはならないことをしてきたのよ。その父の収入で生きてきたわたしも……」

節子はいきなり両手を床についたかと思うと、福子に向かって深く頭を下げた。

「ごめんなさい。何度言っても足りないけれど、福ちゃん、わたしあなたに本当にすまないわ」

深く下げられた節子の頭から美しい髪がさらさらと床に落ち、福子は思わず顔を背けた。節子に謝ってほしいなどと思ったことはない。それなのに節子は福子に詫びるのだ。

「……節子さん、顔をあげてくださいらない。節子さんが謝ることではないもの。それにわたし……あなたに謝られるとなんだか悲しくて、惨めなような気持ちになるの」

福子は言ったあとで、しまったと思った。そう思っただけでも胸のうちを明かしたことはなかったのだ。福子は口を押さえたが、言ってしまった言葉はもう戻らなかった。しかし節子は顔を上げると、その気持ちわかるわ、と涙も拭かずと言った。

「わたしも、福ちゃん、あなたからすまないとか苦勞をかけたくないとか言われると、すごく惨めな気持ちになるもの」

「え？」

思っただけでもみなかった言葉に福子は目を瞬いた。なぜ節子自分が自分と同じような気持ちになることがあるのだろうか。

「どんなに福ちゃんにゆるされたいと思っていても、反対にあなたからすまないとと言われると、それを拒まれているような……そんな気持ちになってしまってるね。もちろんあなたがそんなつもりじゃないことはわかっているわよ」

節子の声はやさしかったが、意外な言葉に福子はどう反応していいかわからなかった。まさか自分の言葉が節子を惨めにさせていたとは思ってもよらなかったのだ。

節子はやさしい声のまま語り始めた。

「あのね……わたしの目標はね、わたしをまともな人間に戻すことなの。福ちゃんたちをお店に出して得たお金で、上等の着物と食べ物で生活していたあいだは、わたしはまともな生き方ではなかったと思うの。まずはわたしは自分で働いて得たお金で自分の着る物を買ったわ。あの時は本当に嬉しかったの、やっと真人間になれるんだと思った。でも福ちゃんに詫げられているうちは真人間には程遠いの」

福子は、去年節子が旭川から戻ってきたときに着ていたセルの縞柄の着物を思い出した。その時は福子のほうがずっと高価な着物を着ていて、福子はそれを後ろめたく感じていた。節子さん旭川で苦勞なさっているのね、と。

今も節子は安価な生地を着物を着ている。しかし節子は自分で働いて得た報酬でやりくりをしながら必要なものを手に入れることに、喜びを感じているのだ。

「佐野文子先生の話、したでしょう？」

福子は頷いた。節子がその涙で濡れた顔をやと拭ったので、ほっとしていた。

「公娼廃止運動をしている方でしょう」

「そう。佐野先生、どんな脅しや暴力にあっても屈しないの。講演会するとき、乱暴されて凄かったのよ。わたし見ていただけなのに身がすくんでしまってるね。でもきつとあの方、自分が講演すれば、あぁなってしまうことわかっていたんじゃないかしら。それでも話すのよ。命がけなのよ。なんだか、意志が内側からぎらぎらと燃えているような、その炎が寝ても覚めても消えないような……そんな人なんじゃないかしらって思ったわ」

佐野文子氏の話は節子から以前にも聞いていたし、彼女の運動や活動の影響で節子がこうして福子に娼婦を辞めるように呼びかけていることも知っていた。ただ福子には、人が命をかけるほどの目に自分があっているとは、どうしても思えない。それだから、どこか遠い世界

の出来事のようにしか話を聞けなかった。

「わたし、講演を聞くまではね、本当のことを言うのと、こんなに一生懸命考えなかったの、福ちゃんの将来のこと」

節子はばつが悪そうに視線を落としたが、すぐに強い目に戻った。

「だけど、わたし講演会に行つてやっとわかったの。わたしはまだ真つ当な人間に戻れていないだって。深雪楼にいる人たちを、まずはその最初のひとりの福ちゃんを、自由にしなければならぬって」

節子はその母ハツと共に世話になっている沼崎重平医師のもとで、節子は深城鎌治の娘としてではなく、はじめからひとりの人間として扱われた。沼崎医師や妻や看護婦たちは誰も節子を蔑むような目で見なかったし、節子から物理的に距離を取ろうともしなかった。節子と話すのを避けようとすることも、節子の言葉を無視することもなかった。深城の娘というだけで、そうされることが当たり前の人生を送ってきた節子は、深い感銘を受け、心が満たされていくのを感じた。深雪楼の隣の豆腐屋の亭主や花井菓子店の娘の澄子は、昔から節子を理解

してくれていた。彼らにかけてもらった愛情を思い出し、またそれとも違う何かも感じていた。この沼崎医師のもとで自分はようやく、自分の生きたいと願うように生きていくことができるのだと節子は確信を持つことができた。佐野文子氏の講演を聞くまでは。

「自分だけが満たされていてだめなんだってわかったわ。だって福ちゃんわたし人生の中にいる人なんだもの。わたしが生きてきた人生の中にいる人で、これからわたしが生きる人生の中にいる人なんだもの。わたしが将来どんなに幸せになったとしても、福ちゃんが自由でないなら、わたしの幸せは……そんなものは偽物よ。手の届く場所に自由でない人がいるのに、知らないふりをし続けるのは、そんなのは真人間とは言えない」

語り終えると、節子は福子の顔をじっと見た。「……福ちゃん、わたしあなたが、身請されるのが一番いい道だと思う気持ち、本当はよくわかるのよ。あなたがさっき言ったように、誰もが苦勞をしない道かもしれないとわたしも思うわ。それを蹴って逃げるとなると父に反逆することになるものね。父が怒って怒鳴り込んでくる姿なんて想像しちゃったら……恐ろしく

てたまらないわよね」

福子が何度も頷くので、節子は哀しさを覚えた。福子は恐れているものからただ逃げたいだけで、人生を拒んでいるつもりなどないのだろう。しかし節子は毅然として福子の目を見た。「でもね、福ちゃん。誰かに苦勞をかけるとか、そんなことよりもっと大事なことがあるの。福ちゃんの人生がこれから、縄で括られた牛や馬と同じであってはいけないの。自由のない人生を選んでは絶対に駄目なの」

「牛や馬って……」

福子は衝撃を受けて言葉を詰まらせたが、節子は話し続けた。

「逃げたあとで父が何をしてくても、わたしたちみんな立ち向かうわ。それはあなたに負わされた苦勞なんかじゃなくて、わたしたちが自分で選ぶことなのよ。父が何をしてくたつてわたしたち平気よ。真つ当な生き方を選んでいくという自負があるんだもの。拓一さんも耕作さんも同じよ。あなた拓一さんの足の怪我のこと、勲章のように思っているでしょう？拓一さんが誰にも何も責められるところのない立派な人であることの証だからでしょ？そういうことなのよ。父のような人間に何をされたところ

でわたしたち、失うものなんてないのよ」

節子の声は湿り、目には涙を浮かべていた。

「福ちゃん、わたしたち、あなたがしてきた苦勞や感じてきたつらさを、どんなにわかっていてもきつとわからないわ。でもあなたにそれを負わせたまま、ひとりで知らないところへ行かせてしまったら、もう取り返しがつかないの。あなたが自由になってくれれば、わたしたちあなたと一緒に今度こそ、つらいことも嬉しいことも分け合って生きていけるはずなの。それが本当の人間同士の生き方でしょう？そうやって生きていきたいの、拓一さんも、わたしも。福ちゃん、あなたと」

熱い手が福子の手に触れた。節子の手が福子の手の甲にそつと重ねられていた。その白い肌を見ながら、福子は心の中に激しく嵐が渦巻くような、と同時にしんと静まり返るような、不思議な気持ちになっていた。

縄で括られていたのか、牛や馬のように。少なくとも節子にはそう思われていたのか。福子は七年間地獄のような日々耐えてきた自分が憐れに思えた。自分の母サツや、拓一たちの母佐枝のような、静かな生き方でいいと福子は

思っていた。思いを秘めたまま静かに生きることが美しきだと自分に言い聞かせていた。自分は七年の間、ちゃんと人間として生きたのだと思いたかった。それを牛や馬のようだと簡単に言ってしまう節子に、何がわかるだろうと福子は思った。思い立ってすぐにひとりで東京まで行ってしまうような人に。心のうちをなんでも話してしまえるような人に。

そう思うと同時に福子は目の前の節子の真実から逃げられないような、逃げるべきではないような気持ちがあることも無視できなかった。(たくさん話してくれたわ、おそらく本当のことを)

(節子さんが勝手に話したことだわ)

(でも、嘘ではないと感じたわ)

(だとしても、わたしはどうすることもできない)

(今度はわたしが真実を示す番だわ)

(わたしの真実……)

心のうちで葛藤していた福子は、口の中で小さく笑うと節子の熱い手のひらの下からそっと手を抜いた。

「節子さん、わたしには何も無いわ……わたしには、節子さんの真実に応えられるような何

かがないの。ひとつもないの。空っぽなのかもしれないわ」

話しながら、福子の頬に涙が伝った。自分が空っぽだと知るのがこんなに淋しいことだとは思わなかった。さっきまで節子の手のひらが重ねられていた手が急速に冷えていくように感じた。

「こんなわたしでは、本当の人間同士の生き方なんて、きっとできないわ。自由になったとしてもきつとわたし、今と同じように深雪楼の父さんのこと、ずっと恐ろしがっているだけだと思ふもの」

話す声が自分でもわかるほど震えていた。福子は涙を止めようと袖を目に当てたが、涙は余計に溢れ出た。福子は深城のことが恐ろしい。本当に恐ろしいのだ。かたや節子はその父親のもとから出て行ったり、戻ってきては物申したりしているというのに、自分はどうとただ恐ろしがっているだけなのだ。節子の言った通り、自分は本当に縄で括られた牛や馬と同じになつていたのだと福子は悟った。

「いいえ、できるわ、福ちゃん！」

節子が大きな声を出したので、福子はびっくりして動きを止めた。

「福ちゃん、それこそが福ちゃんの思いでしょう。福ちゃんは本当の人間だわ。だって真つ当な人なら誰でも恐ろしいと思うもの、自分の父のことだけど。福ちゃんは空っぽなんかじゃない。借金があることがとてもつらいということ、人が自由を奪われることが本当に恐ろしいことだということを知ってるんだもの。空っぽだったらわかりっこないでしょう」

節子の頬は上気し、肩は上下していた。

「だからね福ちゃん、一緒に立ち向かわせてほしいの、その恐ろしさと。もし身請されても、それで恐ろしさと縁が切れるとは限らないでしょう。その時に福ちゃんをひとりになんてしたくないのよ。どうせ恐ろしいなら、対峙する人間の数は多い方がいいじゃない？わたしも拓一さんも耕作さんも、ずっとそういうつもりなのよ。福ちゃんが怖い時も一緒なら、福ちゃんが泣く時も一緒がいいの、もちろん福ちゃんが笑う時も。どんな福ちゃんとも一緒がいいのよ。一緒にいたい」

「そう……なの……？」

福子は目を丸くした。節子にはににこと頭を縦に振った。どんな福ちゃんとも一緒がいい、という言葉が福子の耳の中で鳴り響くようだった

た。

「わたし、わたし……そんな風に……誰かに言われたこと今までないわ」

顔を俯かせ、頬に血を昇らせながら福子は消え入りそうな声で呟いた。

「福ちゃん……」

拓一も自分も同じようなことを何度も言い続けていたはずだと思いながら、しかし口には出さずに、節子は身を縮めた福子の背中をやさしく摩った。その手のひらの感触が福子には泣きたいほど心地よかった。

福ちゃん、と節子に呼ばれるようになったのがいつからだったか福子はよく覚えていない。それまでここ深雪楼ではずっと小菊と呼ばれ、小菊と名乗っていた。福子が生きる上で小菊であることは是非もなかった。福子をお菊と呼ぶ者たちはみな縄を手にとって無意識的に、もしくは意識的に福子を支配しようとしていたのかもしれない。手に縄を持っていることに気づいて離れた節子は、どこかで何かを感じたのだろう。小菊小菊と呼ぶ人の、そして自分の声を聞きたびに自分自身の輪郭がぼんやりと曖昧になっていくこの深雪楼で、節子が福子の名

を呼ぶ声はいつも目が覚めるほど明瞭だった。もし身請された先で小菊と呼ばれ続けることがあれば、福子はいつまでも福子に戻ることができないのだ。首に括られた縄の先が、いつまでも誰かの手に握られたままなのだ。それはどんなに……

「節子さん、わたし……わたしとして、ひとりの人間として、生きていいのかしら」

福子はゆっくり顔を上げながら言った。

「もちろんよー」

「だとしたら、わたしこのままではだめだわ

……ここにはだめだわ」

「そうよ……そうなのよ」

「節子さん」

福子は初めて節子をしつかりと見た。今にも泣き出しそうな目が節子の視線と結びついた。

「……助けてください」

その声を聞いた時、節子の頭に一度も聞いたことがないはずの、福子のふりしぼるような叫び声が響いた。

十勝岳の噴火による泥流災害が起きたと聞いて急いで札幌から戻ったとき、節子は想い人の生存を諦めざるを得なかった。悪夢を見てい

るようだった。百四十四名が泥流によって命を落とした。市街で耕作と拓一とぼったり会った時、節子はあまりに驚いて笑い声が出てしまった。福子も生きていると知り、こわばっていた全身から力が抜けたのを覚えている。耕作が、そして福子が死んでしまっていたら、自分はどう生きていいかわからなかっただろう。のちに福子がどのようにして泥流の中から助かったのかを聞いた。福子も耕作もお互いをお互いと知らずに助けを求め、求めに応えた。幼馴染だとか、想い人だとかいう関係ではない、人間と人間が生きようとした姿がそこにあったのだと節子は思った。どんなに節子が嬉しかったか福子も耕作も知らない。あの時助けを求めてくれて、それに応えてくれて、生きていてくれてありがとうと節子は一人で大泣きしたのだ。

節子は福子の目を見つめたまま、福子の手を取った。求めに出来ないという選択肢はなかった。ずっと節子は応えたくて、今ようやく求められたのだ。それは節子にとって、ゆるぎされたという願いが叶うような気持ちだった。

「助けるわ、福ちゃん。わたしと一緒に来てくれる？わたしと……わたしたちと一緒に生きてくれる？」

節子の瞳は薄く涙を浮かべてきらきらと潤んでいた。この人はずっと真実な人だったと福子は思った。自分も真実に生きたい。しかし耐えることばかりを強いられていては、それは難しいのだと福子は悟った。静かに思いを秘めていても、小さな幸せを感じられるようになって、それでも襲ってくる死にたいほどのつらさは、自分ひとりではどうしても乗り越えられなかった。それは仕方のないことだったのに、差し伸べられる手をずっと拒んでしまっていた。その手を取ることもまた真実な人間としての生き方なのではないかと福子はようやく気がついた。

「一緒に生きたいわ。そしてわたしもあなたを、いつか助けたい」

節子がつこり笑い、そのまま顔をくしゃくしゃにして涙をこぼした。伝染したようにぼろぼろと涙を流しながら、美しい人だと福子は思わずにいられなかった。

翌朝早く二人は準備を整え、深雪楼を出た。上富良野駅で無事に汽車に乗るまで誰に見咎められてもおかしくはなかったが、幸い誰にも不審がられることはなかった。福子は駅に着く

まで節子の手を強く握っていた。逃げると決めたものの恐ろしくてたまらなかったのだ。節子は福子の手をずっと強く握り返していた。

「無事に乗れてよかったわ」

節子が笑顔で囁いた。節子の隣に座った福子はまだ息が整わなかった。汽車が出るまでずっと息を詰めるようにしていたのだ。

「大丈夫？もう汽車は出たんだし、楽にしたらいいわよ」

福子は頷いて体の力を抜いた。

「節子さんも緊張した？」

「ええ、とっても」

「東京にひとりで向かった時も？」

ずっと聞きたかったことを福子は尋ねた。節子は目を丸くしたが、すぐにつこり笑った。

「もちろん緊張したわ。でもあの時はね、怒ってもしたし悲しくもあつたわ。それに先が見えなくて不安で、怖くもあつたわ」

「そうだったの……」

節子も自分と同じような思いを抱えていたと知り、福子は今までとは違う親しみを節子に感じた。

「でもね、あの出奔を後悔したことは一度もないの。福ちゃんあなたにもね、後悔なんて絶

対させないわ」

節子は胸を張って笑った。

「……節子さん、ありがとう」

福子が心を込めて言うのと、節子につこり笑って顔を紅潮させた。

さっきまで節子の手を握っていた手のひらがまだ熱く、福子はその熱を閉じ込めるようにそつと両手を合わせて祈るように指を組んだ。節子を取り出した白いハンケチが陽の光を跳ね返して眩しげに輝いた。それに目を細めて、福子は胸いっぱい朝の空気を吸い込んだ。新しい日を告げるように汽笛が大きく鳴った。



## 泥流地帯・続泥流地帯を読んで

石庫 要



数年前、八十半ばを超える母が旭川市の妹（私の叔母）を訪ねたいと言う。もう年齢的には、これが最後になるかもしれないから、そして、一人で行く自信がないので私に同行せよとのことであった。実は、私も叔母を訪ねたことは一度もなかったのだ。

旭川市と言え、昔読んだ小説作家の三浦綾子の出身地ではないかという興味が沸いた。そして、調べれば、三浦綾子記念文学館と言うものがあり、併せて上富良野の景色に憧れ来道計画を立てたのだった。

これまでに、三浦綾子作品は、「塩狩峠」と「氷点」を読んだことがあった。

今回、本作文コンクールの募集をSNSで見ると『泥流地帯』と『続泥流地帯』を知った。久しぶりに三浦作品に触れたくて読み始めると物語の構成力と展開力が素晴らしく、本格的な小説を読んだ満足感に満たされた。

昭和50年代に発表された作品、しかも舞台は大正末期から昭和の初めの上富良野村、しかし時代背景はどうであれ、「耕作」、「拓一」、

「福子」、「節子」達が生き生きと私の頭の中で躍動する。時代を越えた普遍的な人間性である真の優しさや思いやりとは何であるのかを問うており涙を誘う。

頭脳明晰で明るい耕作が読者の気持ちを代弁している。三浦綾子は、耕作を通して世の中の不条理や理不尽を訴え、その心の置場を探し求めている。彼女の心の安寧は、究極的にはキリスト教へ向かうのである。しかし、読者は宗教を超越した何か、宇宙の理にそれぞれの神を探し求める。そこに普遍性を強く感じるのであろう。

近年、地震の活動期に入ったとも言われ、また気候変動もあいまって自然災害が多発してきている。大災害の復興には膨大な費用と時間が必要である。泥流地帯は、そこに一つの「答え」を暗示しているのではないか。

やはり最後は、「人の心」の大切さである諦めない気持ち、そして損得を超えた万人に対する優しさではないか。是非とも、今の時代だからこそ映画化をして多くの人に広く知ってもらいたい物語である。特にラストシーンの「白いハンケチ」は絵になる。

本年7月の熱海市伊豆山地区の土砂災害は

その凄まじさが何度もテレビに映し出されて衝撃的であった。今なお、行方不明者がおり心痛む大惨事である。泥流地帯のなかの土石流も同様のものではなかったのか。

私の住む町の山間部にも、土石流が起こり得る危険地域がある。以前、土地の人が大雨が降った時には、川が轟轟と音を立てていると言っていたのを思い起こす。これは、大きな石や岩が流され、それらがぶつかり合う音だと言うのである。

災害は、他人事ではない。日本列島はおろか世界中どこにでも起こり得ることであると、改めて肝に銘じる必要がある。

私の小学生時代の将来の夢は、ジェット機のパイロットか学校の先生になることであった。幼いころの夢は叶わず、サラリーマン生活を40年余り過ごした。

定年退職後の今まさに、自由時間がある。拓一や耕作のように、あきらめず、ねばり強く、そして優しさを持って社会のために、何かもう一つできることがないものか、探してみたくなった。

『ふんやう』

(ペンネーム) もち



外は闇だった。闇がねっとり手の先についてくる。そんな書き出しから始まる物語。人々の胸の中で蠢く闇を暗示させる。農家を営んでおり、貧しいながらも懸命に生きている石村家が主人公で物語は展開される。

十勝岳は道央、道東を通して最も活動的な火山であり規則的な噴火を繰り返している。大正15年5月24日。十勝岳大噴火。自然の災禍。前夜の降雨が続く小降り、誠に陰鬱な日。和に十勝岳は噴火し、山津波が起き泥流にのまれた。

十勝岳の爆発により大規模な火山泥流が発生。

アイヌ語で「フーラヌイ」は富良野の古地名。フーラヌイは泥流地帯を表現した地名。臭気のある水の流れる川の意味。昔から十勝岳の噴火は人々の周知の事実であったことが伺える。泥流地帯はこの噴火前後の人々の生き方について、視点を変えながら進んでいく。

天災は忘れた頃にやって来る。天災には敵わない。起きたらどうしようなどと考えているゆとりがあれば、今この瞬間をどう過ごすか考えるべきなのではないか。死は確実、誰にでもやって来る。因果応報は人間の理想、願望にすぎない。自然災害は私たちにとって避けられないものである。人間はこの地球で一番偉いと錯覚しているが、地球にとってはちっぽけな上澄みではない。自然と共生しながら生きなければならぬ。この災害は人々に生きるとは、生きることの難しさを問いかけている。どうしようもない、説明がつかないことにどのように向かい合うべきか。他者がいるからこそ幸せ、不幸を感じる。それなのに自分のことに必死で回りをしようとしないう。自分の考え以外は排除しようとして必死でみつともない。ふるさとを思いだし、終わりを思い描いたとき、良い人生だったと思えるように、悔いがないように生きなければならぬ。ふるさとの復興とはみんなの気持ちの向きが一緒でなければ成り立たない。だが、多くの人は、目の前で起こる出来事に反応すること必死。本当は、様々な問題に目を向け、視点を換え生きていかなければならない。人間が人間らしく生きることの素晴らしさと難しさ

を感じ続けなければならない。自然災害が起るとき一般的でない振る舞いをする現象がある。決して自分中心にはならず、死をどのように迎えるか、それは今からの行動、心がけで変えることができる。どれだけ頑張ったかで人の価値は決まらない。判断する人はいない。人間を一言で頑固とか強情だとか言い切ることではない。今日の自分は必ずしも明日の自分ではないのだから。自分自身の心の動きは他者の方がもっと正確にとらえている。

「見ないことは書くな。自分が本当に見たことを書け。聞いたことを、聞いたとおりに書け。そして自分の考えたことを、自分の考えたとおりに書け。」考えることを放棄せず、今の自分に何ができるか。

「自然現象と過去は変えることはできないが、未来と社会は人々の努力で変えられる。」人間が人間として人間らしく生きることの難しさと素晴らしさ。未来に向け、どのように生きるのがはすべて自分で選択することができる。この教訓を、石村拓一の背中から学ぶことができる。人生の試練を描き、生き方を問いかける

【泥流地帯】を読むことで知らなかった世界、当時の経験、教訓を感じてもらい共生の和が広がっていくことを祈る。

十勝岳連峰がある「ふるさとの風景」を未来に残し、広めていくこと。ふるさとを胸に焼きつけておくということは、人間として大事なことで。懐しさで一杯のものを持っていれば、人間はそう簡単には墮落しないものである。

最後に、正しきものには苦難がある。自分で正しいと思ったことはしたほうがいい。人は毎日選択を迫られている。

「天知る、地知る、己知る。」

(ペンネーム) カオリン



「自分がされて嫌なことは人にしたらあかん。絶対に自分に返ってくる。」

そう親に言われて育った。まじめにすごしていれば結果はついてくる。と。

ところがいつ頃からか理不尽なことに気づき始める。それが自分の努力不足だけで片づけていいのか。少しスタート地点が違うような、そして少し滑り落ちた時にもう元の場所にすら戻れない。無力感。

親になった時、子供らの顔を見て、

「元気に育ってくれればいい。」

と思う。ところが元気であれば、もう少し速く走れば、もう少し勉強ができればと、いつしかぜいたくになってくる。

『もう少し』を手に入れるためにお金をかける。『課金』だ。塾に行かせ、スポーツを習わせ、お金をかける。買ってあげたいものをがまんさせ、送り迎えのために時間をかける。

それでも結果が約束されるわけでもない。世の中には『親ガチャ』という言葉までうまれた。親というカードが、ゲームの中でいうすばらし

いカードであれば、その子供の人生もかわるらしい。言えるだけまだましなのか。

自分がもがくのはかなわないが、子供らがマインスからのスタートだけは許してほしい。

理不尽と思う考え方がいけないのか。考え方をかえないといけないのか。

親の話では兄弟がいれば、楽しくやっていったようだが、今の世の中兄弟がたくさんいても一人でも間違いがあれば、救いようがないほどの負の遺産となりそうだ。子供らは今のところ楽しくやっている。長女には本当に感謝している。

子供らの顔を見ながら、親に言われた言葉を時折思い出し、毎日まじめに生きている。

子供らにも口酸っぱく、伝えていかなければいけない言葉だ。

真面目に生きるとは？

(ペンネーム) 和泉 蜻蛉



『泥流地帯』(三浦綾子 新潮文庫)・『続泥流地帯』(三浦綾子 新潮文庫)を読了した。この作品は、大正15年5月の十勝岳大噴火をテーマとして扱っている。『泥流地帯』は昭和52年3月、『続泥流地帯』は昭和54年4月に、単行本が発売されている。

『氷点』を書いた三浦綾子さんのことはもちろん知っていた。新人賞を獲ったわけでもなく、芥川賞を受賞したわけでもない。朝日新聞の1000万円懸賞小説に入選し、作家になるのは珍しいのではないだろうか。もちろん作家は実力勝負の世界だ。

三浦綾子さんは13年間闘病生活を送っている。肺結核と脊椎カリエスに苦しみながらも絶望しなかったのは、クリスチャンだったからだろうか。私はキリスト教に興味もなく、信仰心もないので恥ずかしくなる。

しかし読み慣れていない作家の文章というのは読みづらく、すんなり頭に入ってこない。私の読解力がないのだろうか。結局『泥流地帯』・『続泥流地帯』を、何度も読み直すことになった。書店に行っても三浦綾子さんの本を、うかつ

に手に取ってはいけな、と自戒してしまう。『泥流地帯』・『続泥流地帯』は、エンターテインメントではなく、文学だ。三浦綾子さんの作品は、読者が作品と向き合う覚悟が求められる。

十勝岳大噴火は、東日本大震災のようでもあり、大自然の前では人間は無力だと思いつた。『泥流地帯』(新潮文庫)・『続泥流地帯』(新潮文庫)には、「○参考文献並びに資料」と、巻末に列挙されている。被災者にも、丹念に取材しているのだろう。

石村家は祖父母の市三郎とキワ、拓一、耕作、富、良子の6人の家族だ。母・佐枝は未亡人であり、札幌にいる。『泥流地帯』・『続泥流地帯』の登場人物の台詞は、印象に残る。いくつか紹介してみると、

「人間の偉さはな、物をどれだけ持つてるかということでは決まらん。金をどれだけ持つてるかということでも決まらん」

『泥流地帯』(新潮文庫) 47ページより引用。

という祖父・市三郎の言葉は、納得してしまう。昔の日本人は気高く、誇り高かったのだろう。私も見習いたい。しかし現代の日本にこういう大人はいるのか。

「売られた女は、男の玩具(おもちゃ)なんだ。お前にはまだわからんだろうがな。一度地獄に

落された女を、嫁にもらう奴はなかなかいないからなあ」『泥流地帯』(新潮文庫) 234ページより引用。

娘の身売りなど、昔の日本では珍しくもなかったのだろう。福子はかわいそうだが、貧困が悪いとしか言いようがない。拓一は福子を助けようとしており、心打たれる。

「こう考えて来ると、どうも世の中まちがってるよな。金持はますます生活が楽になってよ。俺たち百姓は苦しくなる一方だ。(略)『泥流地帯』(新潮文庫) 297ページより引用。

小作農家は一生懸命働いても、報われない。資本主義に批判的なように思える。しかし拓一は社会主義者というわけでもなく、イデオロギー的な考え方を持つていないわけでもないのだろう。

「こんなむごたらしい死に方をするなんて……まじめに生きていても、馬鹿(ばか)臭いようなもんだな」『泥流地帯』(新潮文庫) 533ページより引用。

という耕作の言葉には、思わずうなずいてしまう。拓一、耕作兄弟は不遇な一生になるかもしれないが、なぜ真面目に生きるのだろうか。私だったら世の中が嫌になり、自殺してしまうかもしれない。



「お母さん、世間って何よ。世間ってのはね、要するに一人々々の人間よ。何を世間に遠慮しなければいけないのよ」『続泥流地帯』(新潮文庫) 312ページより引用。

節子が母・ハツに言った台詞だが、世間体を気にするハツと対照的に、節子は力強く頼もしい。

『泥流地帯』(新潮文庫)の裏表紙には、「真面目に生きてても無意味なのか?」という文章がある。これがこの物語のモチーフなのかもしれない。現代は泥臭く生きることが軽んじられている。

『泥流地帯』・『続泥流地帯』を読んでも、残念ながら救いがなく、憂鬱になる。私は拓一や耕作のように、困難に立ち向かえるだろうか。おそらく逃げ出してしまおう。耕作のような真つ当な生き方は無理だ。

これから日本は貧しくなる。スマートフォンがあるから、いくらでも暇は潰せるが、文学を読む人は少なくなるはずだ。三浦綾子さんのような作品を読むのは、読者もエネルギーがいる。しかし読む価値は十分ある。文庫でも電子書籍でもいいから、ぜひ作品を読んでほしい。

(了)

# 『善因善果・悪因悪果』の真実とは

小玉 加余子



十勝岳の大爆発により、黒い泥流が物凄い勢いで開拓部落に押し寄せ、家屋を破壊し死者行方不明者を多数出した。田畑は硫黄と流木、石におおわれ村は壊滅状態となった。

災害に遭わなかった者もいれば、家も家族も失い自分一人だけが助かった者もいる。人々は嘆き悲しみ、

「あんなにいい人がなぜこんなむごい死に方をしたのか。」

と口にする。また主人公の二人をよく知る者達も、

「どうして、貧しきにも親の不在にも耐えて明るく誠実に生きている拓一と耕作兄弟が災害に遭い、あくだいことをしている深城みたいな者が災害に遭わなかったのか?。」

と声をそろえて言う。真面目に生きていても無意味なのか? だれもが考える、この納得のいかない問いの答えがこの小説の中にあり、私自身も共感し深く考えさせられた。

『善因善果、悪因悪果』何か良いことがあるとそれは何か良いことをしたからだとか、精進が

良かったからだとか人々は考える。その反対に、病氣になったり怪我をしたり災難に遭うと、日頃の心掛けが悪いからだなんて考えてしまう。だが現実には決してそうではない。それは、人間の願望、理想に過ぎない。悪い奴は滅びてほしい、いい人間は栄えてほしいそういうも願がっているうちに、悪いことがあれば何の罰だとか、いいことがあれば精進が良かったとか、そう勝手に思うようになってしまったのである。

また、本人が悪いことをしていないのに災難が重なると、よつぽど『前世』で悪いことをしたとか、何かの祟りじゃないか『先祖の祟り、仏罰、神罰』だと言う人もいる。それも結局は悪因悪果のつじつまを合わせる為に出た考えで、自分の子孫を守るのが先祖であって、死んでから子孫に崇つてやろうとは思わない。ご先祖でさえ崇らないのに、神や仏は尚更そんな恐ろしいことをいわれもなくしないのではないかと思う。よく人は、『運』が良かったとか、悪かったかと言うがそれもまた、善因善果、悪因悪果の考え方と同じである。

では、災害に遭ってしまったことをどう受け止めればいいのか。それは、だれにでも災難は訪れると言うことだ。だからこそ、もしものこ

とを考えて、日頃から防災意識を持つことが大切だ。そうすればもつと早く避難出来、命が助かったかもしれないのだ。

問題は、苦難に遭った時にそれを災難と思つて歎くか、試練だと思つて奮い立つかその受けとめ方が大事なのだ。試練だと受けとめて立ち上った時に苦難の意味がわかる気がする、拓一は言つた。そして、

「ほかのいい土には、俺は何の心も動かん。こんだけ、じつちゃんやばつちゃんや、姉ちゃんや良子の命ば…奪つた泥流だから…。だからなあ、耕作、俺は元の土地に戻してみたいんだ。燃える土だから、俺はやってみたいんだ。じつちゃんたちが開拓した時、一本一本木を伐り倒してな、その度に空がひろがっていくのを見て、歓声を上げたつていうじゃないか。そんな苦勞を俺はな、硫黄臭い土に鍬を入れることで味わつてみたいと思うんだ。」

と、最も被害の大きかった稲作地帯に転居し、田を埋め尽した硫黄を含む大量の泥と流木の撤去作業を何日も続けた。耕作は、はたして田はよみがえるのかと弱気になるが、拓一は、

「大変だからと言って投げ出せばそりゃあ簡単だ、大変な時にこそ持ちこたえる馬鹿がいな

いとこの世は発展しない。再び土が息を吹き返すならば、それは日本の大きな利益なのだ。一度息を吹き返した土は、十年二十年、いや百年千年の後までも、米を稔らせていくにちがいない。楽なことなら誰でもやるさ。」

しかし難儀なことは、やる気のある者でなければやれないんだ。」

と、意気込んだ。まさにその通りだと思う。復興を試みたが、あきらめて上富良野を離れる者や、巨万の金を注ぎこんで復興するのは無駄だとか、そんなところに金をかけるのは日本国の大損失だなどと非難や中傷をする者も多し中、拓一の常に前向きな姿勢には頭が下がる。そんな拓一のような志のある者がいたおかげで、今の上富良野の稔りある豊かな田園風景があるのだ。復興をあきらめていたら、今だに草もはえない流木と石の野原が広がっていたに違いない。

復興を始めて、やっと稲が土に根づいた時『拓一は畦道に屈みこんで肩をふるわせて泣いた。耕作はその傍に立っていて、叫び出したい思いだった。』この努力の結果が、苦難の意味であり、苦難を乗り越えたからこそ味わえる歓喜のおたけびなのだと思ふ。

この泥流地帯の小説は、今も各地で起きているさまざまな災害にも当てはまる。一夜にして、家や財産、家族を失ってしまった者の心に寄り添う小説ではないかと思う。失ってから分かる感謝の気持ち。助け合い、励まし合つて苦難を乗り越え、その先に見えた希望の光に喜びを感じる。まさに、人生の試練と教訓が綴られた感動の一冊である。

## 熱海と私と泥流地帯

(ペンネーム) 秋葉 さし



馴染みのある町が一夜にして、見たことのない姿になる。その恐ろしさを私は今年知った。

熱海で土砂災害が発生した。祖父と祖母の故郷である熱海は、親戚がいることもあり、年に数回訪れる街だった。夏休みには海に入り、冬休みにはしっぽりと温泉に浸かる。お世話になっていた親戚の家は駅から遠い山の中にあるものの、眺めは最高で、山と海が良く見える立地だった。私はそこから眺める熱海の街が大好きだった。

土砂災害が起きた日は、熱海から遠く離れた私が住む街でも、雨風が強かった。外に出られず、警報が街に響く中、眠りについたのを覚えている。雨も風も強いけど、毎年よくあることだろうと思っていた私は翌日のテレビのニュースで、様変わりした熱海の街を目にした。

車で通るあの道が、よく行く場所が、山が海が、様変わりした姿に体を突き破るほどの衝撃を受けた。震えが止まらなかった。土砂災害が起きた日、私は熱海に行く予定だったのだ。祖母が亡くなる前に行っていた温泉旅館に祖

母がこの世を去った報告がてら伺おうとしていた。コロナの流行に伴い、キャンセルをした記憶が蘇ってきた。

泥流地帯を読んで、熱海のことを思い出した。幸いにも私の親戚は怪我也被害もなく済んだ。私ももちろん怪我也被害もなかった。そのことに良かったと思う自分がどこか耕作達の部落の人間ではなく感じた。耕作達の気持ちを分かり合えない他の部落の人間のように、自分のことを思った。

親戚や家族は私に「何事もなくて良かった。日頃の行いのおかげ。運が良かった」としきりに言った。悪意のない、心からの安堵の言葉だった。しかし、その言葉に私は引く掛かりを覚えていた。確かに私達は運が良かった。ただ、この被害の有無を日頃の行いとか、運が良かっただけで片付けていいのだろうか。

耕作達は人生を生きていた。登場人物はそれぞれに心を持ち、自分のやるべきこと・進む道を悩みながらも歩む。彼らは自分の人生をただただ実直に生きていた。お金以上に大切なものを見つけ、目に見えない気持ちや情を大切にし、立派に生きていた。

そんな彼らが一瞬にして、愛する家族や仲間を失う未曾有の大災害に巻き込まれたこと

を、熱海の災害と同じように『日頃の行い』や『運』の一言で私は片付けられないのだ。

「正しき者には苦難がある」。聖書的一部分で、市三郎が耕作達に教える言葉。この言葉を教えてもらった拓一は「辛いこと、苦しいことを通して神さまが何かを教えてくれるのかもしれない。試練だな」と言う。その後起こる災害を考えると、この会話に私は胸が痛む。決して神罰でも仏罰でもないあの災害も試練なのだろうか。熱海で被害に合った方も試練なのだろうか。

災害というものが、神罰でも仏罰でもなく、日頃の行いや運でもなく、試練でもないとしたら、何なのだろう。泥流地帯を読み終えても、私の中で答えは出ない。ただ、人生において災害にあうということの、ままたらなさを強く感じていく。良い人だから被害に合わないわけでも、悪い人だから災害にあうのでもない。それが災害というものだと思う。

物語の最後で、拓一は耕作に「あのまま、泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生れ変わったとしても、おれはやっぱりまじめに生きるつもりだぞ」と告げる。

街も家族も仲間も失くしたが、市三郎から



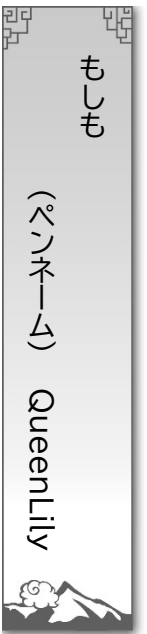
教わった心は失くさなかった。災難があっても、拓一の中には市三郎の言葉と教えが生き続ける。そして、それは耕作も一緒だ。この二人のやり取りはきつと私にも言えることだ。熱海の街が変わっても、私の中の熱海の美しい思い出は胸に残り続ける。

人生は自分の思ったようには進まない。どうしようもなく、もがきながら歩むことも少なくない。様々な災難も降りかかる。綺麗な人生を歩める者は一握りだろう。だからこそ、泥臭くも懸命に真っ当に生きる者に輝きを私は感じる。宝石のような輝きではない、森の木漏れ日のような、朝日が反射している朝露のような輝きを。耕作達は私にその眩い輝きを教えてくれた。

熱海の街は行方不明者がいるものの、被災から復旧へ向け動き出している。私は被災者に、耕作や拓一のように強く生きてとは言えない。耕作達とは別の部落の住民である私が、熱海で被災しなかった私が、容易く言っただけではない。ただ、願っている。行方不明者が見つかりますように。被災者の方の心が休まる時間がありますように。

もしも

(ペンネーム) Queenlily



作文コンクールが始まり、本を読み、どんなことを書くのか考えていたら秋が近づいていました。どうしても、締め切りギリギリになってしまいます。見たまま、感じたままを書くのがホントに難しいです。

読んでいて、すぐに考えてしまうのは、もしも○○だったら…ということです。  
今回はちよつとまとめてみました。

もしも、父義平が亡くなっていなかったら、母佐枝は深城に言い寄られることもなく、札幌へ行くこともなかったはず。

でも、息子達はあそこまで強くなっていなかったかもしれない。

辛い試練を乗り越えたからこそそのたくましさではないだろうか。

もしも、耕作がもう少しだけわがままのできる子だったら、中学校へ行ったに違いない。

中学を出て、北海道大学や東京大学(帝国

大学)などに入り、農業科学などに通じた人に成長したならば、泥流後の復興に活躍したかもしれない。

しかし、学校の先生となってこどもたちとのふれあいを通しての、耕作の優しが見られないのは、読者側の試練かもしれない。

もしも、噴火しなかったら…

大正15年の正月のように穏やかな正月が昭和になっても続いていたのであろう。

妹の良子も母佐枝に会うことができ、髪結をしてもらえたであろう。

姉の富も武井と鉾山労働は大変だが幸せな結婚生活をしていただであらう。

五郎も耕作に支えられながら、立派な青年になっていただろう。

もしも小説『泥流地帯』がなかったら…

人生の数%くらい損していたと思う。

## 月下のひびく

(ペンネーム) 青葉白



りんりん。

鈴虫の声が聞こえる薄曇りの夜。雲から漏れる月明かりにうつすらと周囲の稲田が照らされている。そこは鈴虫と、自分の足音だけしか聞こえない暗い畦道。福子は今その道をただ歩いていた。

「あれ、福ちゃん、どこ行くの？」

「…ちよつと、外の空気吸いたいの。拓一さん」

「危ないよ、俺も」

「いいの、すぐ帰るから。ね？」

「福ちゃん…」

「あの…駄目なら…」

「いや…気をつけてな」

そう言つて福子は一人出てきて散歩をしていた。

拓一は不安げな顔で福子を見送った。こんな夜道に福子が一人出歩くなんて…、拓一はさぞ心配していることだろう。それもそのはず、明日福子はようやく拓一の元へ嫁ぐのだ。そん

な時なのに福子は家でじっとしていられず、外を一人自由に歩いてみたくなった。

(私、明日拓一さんのお嫁さんになる)

上富良野を出て節子とともに旭川で暮らし、しばらく経ったところでようやく福子は拓一と籍を入れることになった。すると親しい人達やささやかながら石村家で祝いの席を設けたいとの申し出があり、福子は旭川から石村家に泊まりに来ていた。

福子は祝宴を遠慮していたが、沢の人々は張り切っており、節子も石村家に混じって盛り上がってしまい止めることはできなかった。そしてとうとう、その日がくる。

しかし福子は自分の置かれた状況にまだ心が追いついていなかった。

(私はこんなこととは無縁だと思っていたのに…これで良いのかしら)

福子は不安を抱きながら歩き続けた。田んぼの稲がサワサワと音を立てて風に揺れている。その稲田は拓一をはじめとする復興に力を注いだ者たちの努力の結集であった。福子の眼差しは稲田に向けられた。

(拓一さん。あなたは立派だわ。誰もこんな景色、また見れると思わなかった。そしてずっと、

私を心から愛してくれて…)

福子は拓一の真実さに心を打たれ、それに応えたいと心に決めていた。それはまがいのない自分の本心のはずだ。それなのに何故か心が定まらない感覚がある。

これからは拓一と向き合つて二人生きていくことになる。

(それなのに、私はどこからっぽだ…)  
福子は立ち止まり、足元を見つめた。

福子は幼い頃のことをよく覚えていた。久々に郷里へ戻ったこともあり懐かしさからか福子の脳裡に一つの遠い思い出が浮かんできた。

ワイワイ、ガヤガヤ…

「何買う？」

権太が言った。

「わち、おかし」

「おれはパッチだ」

貞吾が言う。

正月の買初め日。まだ福子が六年生だった頃だ。耕作、良子、貞吾、権太、福子のみんなで上富良野市街に連れ立って行った。何を買おうと期待に胸躍らせて市街を子供だけでぶらつくのはちよつとした冒険だった。

だが市街に着いてしばらくした後のことだ。一行は街をブラブラしていたのだが、耕作が急にどこかへ走り出してしまったのだ。そして耕作はまた急に駆け戻っては雪をかきわけて何か探していた。

みんなが心配そうに耕作に近づく。福子はその耕作の顔を見てはつとした。今にも泣きそうな目をしていたのだ。福子はなるべくやさしく声をかけた。

「お金、落としたの？耕ちゃん」

「うん」

お年玉で自分の買い物をするをどんなに楽しみにしていただろう。福子は幼いながら耕作の胸の内を思った。結局みんなで五銭ずつ耕作に貸してやることになり、福子も五銭を渡した。

(五銭、か)

思い出して福子は微笑んだ。それはあの時福子の全財産だった。他のみんなは数十銭あったのだろうが、福子は五銭ぼちしか持っていなかった。

(全部あげちゃったのね、私)

それは子どもが何の考えも無くしたことだ。

しかし金勘定が分かる今では、自分がしたことをご不思議に思う。普通ならば自分の為に少し惜しむ気持ちがあってもおかしくないだろう。あの時ただ、福子は耕作のために思っただけだった。今思えば、純粋な思いやり、とも言えるのだろうか。

福子は深雪楼へ売られて遊女として日々過ごすようになってから、自分の心を押さえつけたような、そんな身動きのとれない苦しきを知った。日に日に福子の心の中は疲れ、渴き、死を願うほどになった。それを石村家の人々の前で口にしたこともある。実に心が冷え切っていたのだ。

その福子に拓一は言った。

「福ちゃん、そんなこと言っちゃ駄目だよ。幸せになるよ、きつと幸せになるよ、福ちゃん」

拓一の言葉は自分の心に忘れていた暖かみを少しずつ運ぶかのようなだった。本当は心がそれを欲していたのかもしれない。徐々にそんな気持ちになった。そしてこれまで、拓一をはじめ周りの人々は、福子の借金を受け入れ福子の幸せを願ってくれていた。

福子はふと、その幸せを願う気持ちは幼い頃の思い出と繋がっているように思われた。

(私は…拓一さんや皆と…家族…になれるのかな)

福子はまだ自分の心に残る冷たさが、自分と拓一を遠ざけているような気がして少し恐ろしく思っていた。

再び福子は仄暗い稲田を見つめた。そこは人の強い意志が込められていることを福子は知っている。

さく…さく…。福子はゆつくりと歩き出した。福子は、人の意志と行動は厳しい現実にあっても着実に道を作れるものだと思ふ。拓一の復興を志す姿から教えられた。

…さくさくさく。福子の足取りはしつかりとしてきた。稲がザワザワと鳴っている。

(もう今までは違う…。私は拓一さんと結ばれて周りの人にたくさんの恩返しをしたい…。けれどももし明日、この考えがひっくり返ったら…？)

福子は頭を小さく振った。

(…また、前に進めばいいのよ)

これからも、こうやって一歩踏み出そうとするごとに自分の空虚さが足を引っ張ることだ

ろう。その自分との戦いなのかもしれない。しかし前を向き続けることでしか、自分の人生に道を作り続けることが出来ないように今は思われた。そして福子は今少しずつ歩いている自分の道が、一人では決してなし得ないことだったと振り返り、改めて今沢山のひとの手が自分の手を引いてくれていることを思った。そのぬくもりを今は確かに感じている。

(宝物だ。これが今の私の)

顔をあげて歩く日も、俯き嘆く日も、色んな日があつていいのだ。私はみんなと同じ、人を愛したいと思う人間だ。

そう自分を信じてあげたい。

雲が晴れて月が顔を出した。家に引き返してきた福子を白い光が福子を照らす。家の戸の前に拓一が立っていた。福子が気づいて、

「あつ、拓一さん」

と声を上げた。

「福ちゃん!!」

拓一は気づいてすぐさま福子のところへ駆け寄った。

「おかえり、大丈夫か?」

「ええ、平気。心配かけてごめんなさいね」

「良かった…」

拓一は安堵した。

「待っていてくださったの?」

「いや…な、本当はおつかいようと思ってな。

でも母さんにそつとしとけて…」

「まあ…」

「さ、中入んなよ。冷えるだろう、ちょうどお

茶淹れてるからさ」

拓一が福子の手を取った。

「…ええ」

福子は拓一に手を引かれ家の中に入っていた。

(あたたかい手)

兄の国男が語ってくれたことがある。

「なあ、福子知ってつか。苦労することに価値が無いなんてこと、無いんだべ」

「…?そうよ、だって苦労したら報われるでしょう、普通は…」

「その普通じゃなくってもな。報われなくともな、米一粒実らんくても、そうやって頑張った苦労は宝なんだと」

「…」

兄はそれ以上のことを言わなかった。でも福子は心の中できつと拓一のことだろうと思っていた。

(本当に立派なひとだわ)

この人の手を離したくない。ギュッと拓一の手をしっかりと握った。

明日は精一杯幸せになろう、そう心に決めた。かけがえのない宝物を胸に秘めて。

(了)

香也子の部屋

(ペンネーム) 神楽岡マイ



香也子 皆さま大変お待たせいたしました。お

待たせしすぎたかもしれません。本日の

「香也子の部屋」は「泥流地帯」に出演されて  
いる石村耕作さんをお迎えしました。

耕作 こんにちは。

香也子 早速だけど耕作さん、…ちよつと呼び  
にくいから「耕ちゃん」って呼んでいいかし  
ら？

耕作 えっ…、あつ、まあいいですけど。

香也子 ありがと。で、耕ちゃん、あなた上富良  
野のご出身なんですか？

耕作 ええ。

香也子 私、旭川なの！結構近いわね。

耕作 旭川の学校に合格したんですけど、事情  
があつて行けなくて…。

香也子 まあ！合格したのはどこだったの？

耕作 旭川中学校です。今でいう旭川東高校で  
すね。

香也子 名門じゃない！明石さんの出身校ね。

耕作 明石さん？

香也子 知らないの？「どきんこワイド」に出て

いた人よ。あの人、神楽岡出身なの。

耕作 はあ。

香也子 話がそれたわね。耕ちゃんは学校の先

生やってらっしゃるんですって？

耕作 小学校で教えています。

香也子 まあ！生徒さん、かわいいでしょう？

耕作 とても純粋でかわいい生徒たちです。先

日は深山峠に遠足に行つてきました。十勝

岳の大爆発から復興を目指す上富良野の  
景色と一緒にみて、実にいい経験ができた  
と思います。

香也子 そうそう、その大爆発の話を聞こうと  
思つたのよ。とんでもない災害だったんで  
すってね？

耕作 とんでもないなんでもんじゃありません。  
家も人も馬も鶏も、何もかもがものすごい  
速さで、地面ごと流れていくんです。身内  
も何人か流されてしまつて…。

香也子 そうだったの…。耕ちゃんつらかったわ  
ね。確かお兄さんも流されたんだとか？

耕作 兄ちゃんは「助けに行く」と言つて泥流の  
中に飛び込んでいったんです。あんな泥流  
の中に飛び込んでいつて、助かるわけない  
のに。

香也子 まあ。

耕作 ところが三日目になつて、馬に乗つて戻  
つてきたときには驚きましたねえ。

香也子 助かつていたのね！

耕作 ええ、奇跡的に。まあ、これが「奇跡」と  
言つていいのかわかりませんが、  
とにかく戻つてきました。これ、ネタバレに  
なっちゃいますかね？

香也子 それじゃ「泥流地帯」は「泥流に流され  
たお兄さんが戻つてきました。めでたしめ  
でたし」という話なのかしら。

耕作 それは全く違います！

香也子 あら！気を悪くされたらごめんなさ  
いね。

耕作 いや、いいんです。十勝岳大爆発による  
災害が題材になっているのは事実なんです  
けど、その時代に生きた自分や兄ちゃん、  
そして周りの人々が困難を乗り越えてい  
く姿を感じてほしいですし、北海道開拓  
時代の生活風景なんかも読み取つてほし  
いと思います。

香也子 そういえば、千葉に住んでいるおじさ  
んが「泥流地帯」を初めて読んだとき、最  
初の感想が「ここで終わりがいい！」だったの  
よ。このおじさん、「氷点」を読んだ時も全

く同じこと言っていたの。

耕作 どちらも「続」がありますよね。

香也子 そうなのよ。「続・泥流地帯」を読み終えて、「何か大事なことを教わった気がする」って満足そうにしていたわ。

耕作 大事なことってなんですかね？

香也子 確か「拓一の信念に心打たれた」みたいなことを言っていたわ。

耕作 兄ちゃんのほうが人気あるのかなあ？

香也子 耕ちゃんは原作の中ではモテモテじゃない。

耕作 いやいや、そんなことないです。

香也子 ここだけの話、節子ちゃんと福子ちゃん、どちらが耕ちゃんのタイプ？

耕作 いやあ、そんなこと急に言われても…。

香也子 じゃあさ！節子ちゃんと福子ちゃん、そして香也子の三択なら誰がタイプ？

耕作 香也子さんです。

香也子 まあ、そういう結論になるわよね。わかる。

耕作 はあ。

香也子 話がまたそれちゃったわ。私っておちよこちよいね。てへっ。

耕作 いや、いいんです。

香也子 豆腐屋のアルバイトをしていた時の話

を聞かせて頂戴。

耕作 あれは水が冷たくて大変でした。じいちゃんやんが「人のしていることは、楽に見えるもんだ」と言っていたことを思い出しました。

香也子 歩いて配達していたのかしら？

耕作 そうですけど？

香也子 群馬あたりの豆腐配達は、車で峠道を駆け抜けながらするらしいわよ？

耕作 そうなんですか。

香也子 この話は掘り下げるところじゃないわね。ところで今度映画化されるとか聞いたわ。

耕作 そうなんです。三浦綾子生誕百周年を記念して、数ある作品のなかからこの「泥流地帯」が映画化されるんです。ずっと夢だったのが、現実になるんです。

香也子 ステキな話！当然、石村兄弟が主演なのよね？

耕作 そうなるとは思うんですけど。

香也子 青は出るかしら？

耕作 青？馬の？

香也子 そう！馬の「青」！私なら「青」視点で脚本を書くわ。

耕作 青は原作の半分あたりまでしか出てない

んですけど。

香也子 その青が千歳あたりの牧場で蘇って、馬主が斉藤由貴で日本ダービーを勝って話はどうかしら？ラストシーンは、騎手が「下手な乗り方して、すみませんでした」って言うの！かっこよくない？

耕作 それ、ぜんぜん泥流地帯関係ないですよね？なんなら数十年前にそういう映画ありましたよね？

香也子 そうだったわ。私ったら、つい熱くなっちゃったわ。映画の見どころはどの辺りなのかしら？

耕作 まだ撮影に入っていないのでなんとも言えないんですけど、十勝岳大爆発のシーンの迫力は期待できると思います。ぜひ劇場で観ていただきたいです。

香也子 最後に一つ聞きたいんだけど、この「泥流地帯」が発表された新聞連載された昭和五十一年一月、三浦綾子はもう一つの作品を発表しているの。それはご存知かしら？

耕作 えっ！知らないなあ。

香也子 ヒントは、「泥流地帯」が上富良野を舞台にした小説なら、こちらは旭川を舞台とした壮大な人間ロマンがテーマの作品で、



ミス旭川に選ばれるような美貌をもった、大胆でちょっぴり辛口な性格の女の子が主人公。ここまで言ったらもうわかつちゃうわね！

耕作 全くわかりませんね。

香也子 ああ、まあ、それは残念ね。片や、三浦綾子記念文学館や上富良野町全体で盛り上がっている作品に対して、一部のコアなファンに支えられている作品との大きな違いね。映画化されない理由がわかったような気がしたわ。

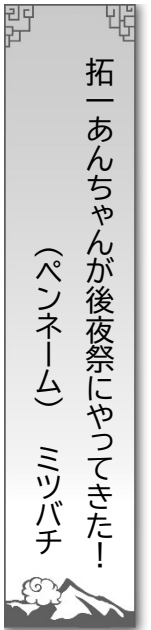
耕作 なんか、すみません。

香也子 いいのよ、気にしないで頂戴。さて、次の「香也子の部屋」は、再び「泥流地帯」の出演者より石村市三郎さんをお迎えして、美味しい豚サガリについてたっぷり語っていただきます！今日のゲスト石村耕作さん、ありがとうございます！

耕作 じいちゃんに会えるのか！これ、夢のような番組だな。

拓一あんちゃんが後夜祭にやってきた！

(ペンネーム) ミツバチ



あたし、ミツバチ。超難関の編入試験を受けてこの春から氷点学園に通う高校二年生。

一年遅れでこの学校に入った理由は、ちょうど一年前のどしゃぶりの日に校門前で転んだあたしをお姫様抱っこして保健室に運んでくれたイケメンを探しているから。氷点学園ロゴが入ったジャージを着ていたから、間違いなく氷点学園にいるはず。

好きなものの甘いもの全般。特技・日付特定。毎日の楽しみは学食でおやつ食べながら、桜ちゃんやニモちゃんたちと恋バナすること。桜ちゃんが隣のクラスの西島君のために手編みのセーターをせっせと編んでいる姿を見ながら、最近あの人のことを思わなくなったのに気付いた。実は、あのイケメン以外にも気になる人がいるの。ねえ、どうしたらいいと思う？

というのも、くじびきで一緒に文化祭実行委員になった隣の席の小山田整君と最近ちょっといい感じになってきた。今日もタイミングがあれば、一緒に生徒会室に行って、一緒に校門を

出て、あわよくば途中でお茶できるはず。

でも、運が悪いことに掃除当番で体育館裏のゴミ捨て場に行ったときに、スクールカースト上位女子・橋宮香也子に絡まれてしまった。橋宮さんはモデルみたいに背が高くて、手足も長くて、しかも美人で家がお金持ちだから(性格は悪いけど)それなりに人気がある。

「最近、整君となれなくしているじゃない」

「えっ……」

な、何故ファーストネームを?! そういう仲なの?!

「香也子のパパは氷点学園にたーーーーーくさん寄付をしている橋宮建設の社長なのよ! あたしと整君とは、親戚なんだから、あんたとは格が違うの!」

「香也子さん、こいつどんな感じでやっておけばいいでしょうか」

もみ手をしながら背後から男子が出てきた。しかも、学級委員で章子ちゃんの彼氏、金井政夫だった。

「とりあえず、フルボッコしときな。動画はマストだからね!」

「金井、あんた何取り入っているのよ! こん

なことやっていいわけじゃないでしょ！」

金井はにやにや笑いながら体をくねくねさせながら接近してくる。

「章子かわいいし、女の子らしくていいんだけどさーしよせん後妻の子だからさー」

……ああ、こんなとき戦隊ものならきつと助けに来てくれる人がいるのに……戦隊レッドでなくてもいいから、あの時のイケメン……来るわけないか。力任せに持っていたゴミ箱で金井をぽかぽか殴りつけると、奴の生徒手帳が落ちた。一瞬のスキをついて拾うと、落ちた時にたまたま開いたページには日付とともに「章子に焼き芋代400円」だの「章子コーヒー代100円」とデートに使った費用が書かれていた。

「金井……あんた、ケチなのね」

金井はあたしから生徒手帳をひったくると「投資したんだから、別れた時に返してもらわなきゃいけないだろッ」と言い捨てて走り去った。橋宮さんは背後に隠れていたもう一人に号令をかけた。

「完治さん、やって頂戴！」

こ、この男は……たしかこの学園でもラブラブだった孝介先輩との貴乃先輩を力にもの言わせ、強引に別れさせたといううわさがある

……もうだめかもしれない。後ずさりしたその時だった。

「ミツバチ！ お前もうすぐ文化祭実行委員会の時間なのに何をしてるんだよ！ ん?！」

駆け付けた小山田君は、周囲を見回すとやはり橋宮さんの腕をつかみ「香也子！ お前まだこんなことをやっているのか！ 辻口さんを転校させ、孝介先輩たちのことで大騒ぎになったのに!!」

「整君には関係ないわ!」

橋宮さんは大粒の涙をこぼしながら「ひどい……整君、香也子のこともうどうでもいいの？ 最近ミツバチさんといちゃついてばかりじゃない。香也子、さみしい……」

と抱き着くように飛びついた。が、小山田君はひらりと交わした。

「もう香也子のごとは、放っておいて！ 完治、今日は引き上げるわ!」

あたしたちをにらむと捨て台詞を残して走り去った。

「こうなったら、みんなみんな引き裂いてやる!」

「香也子!!」

小山田君があわてて追いかけていった。

二人が親戚だということを知っていた。でも下の名前で呼び合って後を追うなんて……それに、辻口さんを転校させた？ 孝介先輩たち？

ただならぬ様子に胸騒ぎがして気になって仕方ない。でも、一旦教室にゴミ箱を戻さないといけないし、委員会の集合時間が迫っていたので生徒会室に急ぐことにした。

生徒会室に行くと、3年の久吉先輩が熱弁をふるっていた。お調子者だけど、明るくて楽しい先輩だ。

「えー今年の後夜祭だが、俺は断然フォークダンスを主張する!」

マイムマイムやジェンカで楽しく盛り上がった後は、円になってオクラホマミキサーを踊る。黒板に円を描きながら、力強く「これぞ、青春！ まさに青春!」とこぶしを挙げて訴えた。

「でもさー、男子と女子が手をつなぐのって恥ずかしいですか?」

誰かの意見に生徒会室にいた十数名が大きくうなずいた。あたしもそう思った。

「あのおな、おまえら。バリバリの文系クラスな

のに、隣のクラスが看護系進学クラスで女子ばかりという理由で強制的に男子クラスにされた俺の気持ちがあるか?! 共学に通っているのに、何故クラスに女子がいない。理系進学クラスでさえ、男女半々なのに、何故俺だけ野郎クラスなのか?! せめて文化祭ぐらい、女子と仲良くしたい」

「久吉、話がそれているぞ。俺が言う」

岩吉先輩が助けを出した。この先輩は、見た目がいかつくて怖いけど、みんなが嫌がることを黙々とこなすから人望が厚い。

「えー、わが校では、例年、後夜祭のときにミス氷点学園を発表している。当然、昨年グランプリに選ばれた広野奈緒実さんと準優勝の川井輝子さんも必ず参加するだろう」

久吉先輩が「広野さんもええけど、俺は断然川井さん。あの冷たい感じがたまらない」とおどけた声でいう。

「こら、久吉。気持ちはわかるが邪魔するな。えー、こゝまでは、今までと一緒だ。が、我々あることに気づいた。なんと、今年は、他校と文化祭の日程が異なるから、ほかの高校の生徒も後夜祭に誘いやすい。だな、音吉」

音吉先輩がにっこり笑った。

「久吉のため……いいえ、この機会に、他校の人にもぜひわが校に来て交流を深めたいので、関係者を通じていろいろお願いをしました。まず、校医の辻口先生を通じて、ミス・旭川西校の辻口陽子さんに声をかけてもらってます」

男子たちがどよめいた。

「ミス旭川西高が来るんですか?!」

「お、俺賛成!!」

真っ先に手を挙げたのは一年生の三井達哉だった。男子たちは争うように挙手をした。冷めた様子で見ていた女子たちに久吉先輩が

「あんな、生徒会顧問の耕作先生を通じて、お兄さんの拓一さんやそのお友達にも来てもらえないかと交渉したで」

黄色い声が生徒会室の外まで響いた。学食にお米やお野菜を納入している石村先生のお兄さんがイケメンとは聞いていたけれど、そんなにイケメンなの? きょんとしているあたしに山崎タミ子先輩が「ああん、実行委員になつてよかった! ファンクラブ作らなきゃ!」と抱きついてきた。

久吉・岩吉・音吉の三人(まとめて「三吉」と呼ばれている)が同時に囁いた。

「もしかしたら、恋が芽生えるか・も・よ」

「やります!! やりたいです! やりましよう、やらせてください!!」

気が付けば一番大声を出して呆れられたのはあたしだった。久吉先輩がこそと耳打ちした。「小田山とイイ感じやもんね。いいでしょ、このアイデア」

あたしは先輩の両手を握りしめた。

「今度、学食のおしるこおごります!」

「たのんだでえ。コーヒーもつけてね」

うちの学校にミス旭川西高が来る、イケメン拓一あんちゃんが来る、しかも手をつないで踊れる。学校中がこの話題で持ちきりだった。

フォークダンスであわよくば女子と手をつないで、というところからはじまった話がまさかこんな大騒ぎになるとは……文化祭実行委員会のメンバーは、日に日に加熱する状況に頭を抱えた。一方、少子化による生徒数減少に頭を抱える事務局長は、この状況に目をつけた。

「学園事務局としては、後夜祭に全面協力するから、旭川西高の辻口陽子さんや石村先生のお兄さん——拓一さんとの交流できる時間を作った方がいい」と上富良野町役場のAさん

を呼び出して、学園のみならず上富良野町の全面的なバックアップを約束した。

タミ子先輩は早々にファンクラブ DTC(『泥流地帯』ファンクラブの略)を作り、自ら会長になった。Aさんは入会者全員に『泥流地帯』のオリジナルグッズ、例えばクリアホルダーやスマホケースなどファンにはたまらない様々なグッズを配った。

当初拓一さんはこんな形で目立つことは嫌だと渋っていた。が、事務局長とAさんが二人がかりで「今こそ、大正泥流から復興した上富良野町のことを知ってもらう機会だから」と説得し、TwitterやInstagramアカウントが開設され、フォロワーがどんどん増えた。

噂通り、拓一さんはイケメンだった。しかも、あたしが編入試験を受けてまで探し続けたあの人が拓一さんだった……遅いよ……あたしの心には小田山君が……でも拓一さんはやっぱりかっこいい……揺れるあたしの心と正比例するように、拓一あんなちゃん人気はうなぎのぼり。(蛇足だけど、あの日学食に食材を納入しに来た拓一さんは、大雨でびしょぬれになったので石村先生からジャージを借りたらしい)作ったお米や野菜を自ら手渡しで販売した

から、学生だけでなく、主婦が飛びついた。時折物静かな女性が袋に野菜を詰めたり、購買者にお釣りを渡したりしていた。雰囲気似ているので多くの人が拓一さんと石村先生の妹さんだと思っていた。

なお、職員のあゆみさんがこっそり教えてくれた情報によると、校医の辻口先生は「……うちの陽子はあるの件で西高に転校したのに……それに妻の夏枝が……」としぶっていたが、後日、学園長と事務局長が菓子折り(中身は学園名物氷点まんじゅう)をもって頭を下げて頼み込んだらしい。ちなみに、ここだけの話だけど、事務局長に陽子さんの握手券をこっそり売ろうと提案したのは、橋宮さんのファンで一つ下の神楽岡マイという子らしい。握手券販売の時間は、購買部に長蛇の列ができ、学食から男子生徒が消え去るという伝説も生まれた。「後夜祭、フォークダンスなくなるのかなあ……」

放課後、学食でジュースを飲みながら思わずこうつぶやくと、桜ちゃんが「そんなのいやだ……西島さん……」とあたしの手を握りながら一緒に泣いてくれた。二モちゃんは「どんな形でも二人の恋がうまくいくといいね」と優しく励ま

してくれた。けど、胸騒ぎがする。何で？ 小山田君と拓一さんの間であたしの気持ち揺れているから？ それとも最近、誰かが広野奈緒実先輩が、友達の京子先輩の好きな人を略奪したと噂をしていたから？(この話には別バージョンがあつて、広野先輩と川井先輩の仲が悪いのは、英語の竹山先生をめぐる三角関係だという説もあったが、京子先輩のお兄さんをめぐって争っていたのだった)

いよいよ当日。辻口陽子さんの実物とはにかくかわかった。体育館には男子学生たちが一目その姿を見ようと押し寄せた。万が一に備え、予め視聴覚室を第二会場として準備していたけれど、それも間に合わなかった。で、事務局長が学園のホームページから在校生向けに動画配信を行った。この動画は多分うちの学園で今でも一番人気がある。

幸いあたしは実行委員特権で最前列のいい場所が取れたので、久吉先輩におしるをさらに5回おごると約束して桜ちゃんと二モちゃんも特別に入れもらった。

ステージ上で拓一あんなちゃんが「こんばんは」

といっただけで、女子たちが黄色い声を上げ、石村先生が「俺は？」と突っ込むと、普段にはない2ショットを撮影しようとかちこちでシャッター音が起った。タミ子先輩らDJのメンバーたちが入口で配られた『泥流地帯』と書かれたウチワを振りまくって歓声をあげる。もちろんあたしたちも。

司会の事務局長が、Aさんや石村兄弟らに話題を振り、『泥流地帯』トークを盛り上げた。そのたびに、隣でニモちゃんは、一言一句漏らすまいと必死にうなずくので、首がもげないか心配になった。最後にAさんが「えー、みなさんに重大なお知らせがあります」と拓一さんに目配せをしたその時だった。突然体育館の電気が消えた。

スクリーンには『泥流地帯』実写映画化決定の文字が現れ、2023年の上映を宣言した。陽子さんがやさしく微笑んだ。

『氷点』のように何度も映像化されるといいですね」

ニモちゃんが感極まってすすり泣いているのを見て、フォークダンスがなくなっても仕方がないかなと納得をしたその時だった。

エンドロール風の映像が流れ、映画製作に協

力をした企業や個人名が流れた。次の瞬間、明らかに他のサポーターとは違う文字の大ききで「橋宮香也子(旭川市)」とあった。そしてド派手な音楽とともに橋宮さんが現れた。

『果て遠き丘』は『泥流地帯』と同じ時期に書かれたのに、この差は何なの!!」

その後は散々だった。

事務局長に「学食におけることを提供したのに、パパの寄付金返せつ」と橋宮さんが暴れる。陽子さんは髪の毛を引っ張られて泣いている。舞台袖で出番を待っていた西島君が制止に入ると「西島さん、ふえーん」と橋宮さんが抱き着いた。西島さんの弾き語りを心から楽しみにしていた桜ちゃんはショックで倒れた。

「桜ちゃん、しっかりして!!」

おろおろしていると拓一さんがステージの上から叫んだ。

「映画見てくれよな! あと、俺、5月24日に福子と結婚するから!」とどきどきに紛れて結婚宣言をした。そのセリフでDJの会長のタミ子先輩を始め、拓一さんのファンたちがパタパタ倒れていく。

「なんてことするのよ!」

思わず大声を出したあたしに、「だから言ったじゃない」と橋宮さんは冷たく笑う。

「知らなかったの? 愛って引き裂くことなのよ」

石村先生が橋宮さんの肩をポンとたたいた。

「エキストラ出演できるらしいから、橋宮も上富良野町にふるさと納税しろよ」

背中を向け、ぶるぶる震えながら橋宮さんが大きくうなずいた。多分、映画『泥流地帯』に橋宮さんもどこかで出てくると思う。その隣で、拓一さんが大きな伸びをした。爆弾宣言をして気持ちさがっぱりしたのだらう。あたしもつられて伸びをしたとき拓一さんと目が合った。ぼろっと涙がこぼれたのは、きっと目にはこりが入ったから。

小山田君とは、その後大きな事件があった。けど、これはこの話とは別の話。もう時間があんまりないから、今は話せない。機会があれば、またどこかでこの話をする。(了)

## 泥流地帯1984 ―報い―

(ペンネーム) よもや四方屋



日が傾き始めてもなおじりじりと暑い日だ。

澄み渡った高い空が、長雨に飽いた五月の上  
富良野に短い夏の訪れを告げる。

水田地帯に構える草分神社の境内は、おろし  
たての紅白幕がぐるりと張られ、ちようちんや  
花輪、万国旗で賑やかに飾りつけられている。  
周辺は近隣の住民だけではなく町長や町議会  
議員をはじめ町の名士たちが顔を並べ、学校  
帰りの子供や見物人でひしめきあっていた。

道路向かいの小学校の廃校から二十年近く、  
春と秋の祭事以外では久しく賑わいから遠ざ  
かっていたこの地域の住民たちは特に今日の活  
気に少なからず心を躍らされている。

社殿の背景には、右手の前富良野岳から左手  
のオプタテシケ山へ、十勝連峰の南北端を結ぶ  
かつきりとした稜線がまるで一枚の絵のように  
視界に収まっている。

すなわちそれは明治三十年に開拓の起点とな  
ったこの地域が大規模な火山帯に形成された

丘陵地帯としては珍しく視界を遮る丘のない、  
耕作に適した平坦な土地であることを示して  
いる。事実、この周囲には見渡す限り水田が広  
がっていた。

田植えを終えたばかりの水田では青々とした  
苗が音を立てず微風にそよいでいる。定規を当  
てたような見事な直線を描く畝の隙間の水面  
に逆さに写り込む青空と十勝連峰は、この季  
節だけ見られる独特の美景だ。

神社の裏手を流れる富良野川は、源流である  
十勝岳の雪融けの影響で水嵩こそ少し高かつ  
たが、五月も中旬を過ぎるとゴーゴーと流れる  
泥濁はすでにおさまっていた。

湿気のないそよ風と川のせせらぎが耳に心地  
よく、少し早めに訪れた暑気をいくらか和らげ  
る。

境内では間近に迫った式典の準備が大詰めを  
迎えていた。幾つもの施設からかき集めたパイ  
プ椅子は色も形も不揃いではあるが整然と並  
べられ美しいグラデーションを描いている。司  
会席では入念にマイク試験が行われ時々甲高  
い音を立て子供たちを驚かせた。

この日のために長い期間奔走してきた式典役

員たちは、滝のように流れる汗を拭う間もなく、  
最後の確認に、来賓の接待にと忙しく動き回っ  
ている。

雑木が繁る境内の奥では、町の名士たちの社  
交場と化した来賓席や子供たちがはしやぎ回  
る広場の喧騒を避けるように老人がひとり、ベ  
ンチ代わりに使われている一枚岩に静かに腰か  
けていた。

短く刈り込まれたごま塩頭の老人は、遠く十  
勝連峰にその濁りのない金つばまなこを向けて  
いた。ときおり木漏れ日に眼を細める彼の目尻  
の、墨を引いたような深い皺は八十年近い人生  
の多くを笑顔で過ごしてきたことを物語ってい  
る。同時に、さらに深く刻まれた眉間の皺  
からは苛烈を極める開拓時代を生き抜いた人  
物特有の威厳が滲み出ていた。

老人は錆鼠色の着物に海松茶(みるちや)の  
縞袴、錫色に細かい地紋の施された一つ紋御召  
羽織といった、決して贅沢ではないが丁寧な手  
入れされた略礼装を涼やかに着こなしている。  
彼はただ岩に腰掛けよく磨き込まれた手製の  
杖に手を添えているだけであつたが、不思議  
と意識を向けずにはいられない、しかし侵しが



たい特別な佇まいがあり、その周囲は音が消え  
時が止まったかのような錯覚さえ覚えさせた。

それでも多くの名士が老人を見ると小走りに  
近づき愛想よく挨拶した。老人も笑顔に向け  
短い挨拶を返した。彼は生来人懐こく話好き  
で誰の相談にも親身に乘る質だが、今日の彼か  
らは冗長な世間話や儀礼的な会話で時間を奪  
うことが憚られる雰囲気を感じられたため、つ  
き合いの長い者ほど軽い挨拶だけでその場を後  
にした。

もちろん町民たちの老人に対する態度はけっ  
して恐れや忌避からくるものではなく、誰もが  
深い敬意を向けていることは明らかだ。

「今日はずいぶん噴煙が高いね」

後ろから声をかける者があった。絶えず濛々  
と白煙を吐き続ける活火山の麓の町ならではの  
の独特な天気のあいさつだ。

声をかけたのは老人と同年代の背広姿の男だ  
った。親密ながらも遠慮がちに声を掛ける他の  
町民とは異なり、心の距離の近さや特別な親  
しみが明らかに感じられる声だ。ごま塩頭の老

人も同じように特別な親しさと敬意が同居す  
る柔和な笑顔を返した。

「義姉さんは来ていないのかい？」

「恥ずかしいとよ」

「相変わずだなあ」

背広姿の老人は笑った。

「お前こそ一人か。招待状は連名だったろう」

「うーん、ずいぶん忙しそうだね」

「ベビーブームってやつか」

背広の老人の妻は現役の助産婦だ。二十代で  
看護婦と産婆の資格をとって以来五十年以上、  
取り上げた赤子は六千人を超えるという。自  
身が画面映える質でもあり、テレビ番組や  
雑誌の取材は枚挙にいとまがない。

「さすがにそれは落ち着いたさ。最近講演に  
飛び回っているよ。やあ、こんにちは」

背広の老人もまた多くの町民から挨拶を受け  
た。誰もが彼を「先生」と呼んだ。年嵩の者ほど  
丁寧な、篤い敬意を彼に向ける。中には直立不  
動になる者もあった。

彼は尋常小学校高等科卒業と同時にそのま

ま母校で代用教員として教職に就いた。生徒  
を直接指導することに強くこだわったことから、  
教師の検定試験に合格した後も校長はおろか  
教頭になることさえ拒み続け、一教師として担  
任の学級を持ち続けた。定年制度のなかった当  
時、五十代も半ばにさしかかったころ後進のた  
め何度か退職を申し出たが、教え子や父兄、地  
域、校内外の関係者らによる極めて熱心な要  
請を受け、六十五歳まで、最後はついに校長と  
して半世紀に及ぶ教員生活を全うした。

退職後も町内の寺院が運営する幼稚園の三  
代目園長として十年にわたり幼児教育に携わ  
り、二年前ようやく教育者人生に幕を下ろし  
たばかりだ。

児童教育と幼児教育に身を捧げたあまりに  
も長い時間そのほとんどを上富良野で過し  
たことから、小学生から古希を超える老人ま  
でその場に多くの者が彼の教え子であった。

「ご来賓の皆様は席におつきくださいあい」

町役場の若い吏員が声を張る。間もなく式典  
が始まるのだ。

ごま塩頭の老人はよっこらせと立ち上がり、

背広の老人と共に来賓席へ向かった。少し引きずっているが足取りはとても力強い。彼の体軀は年齢の割に立派ではあったが青年時代の大怪我の影響で右足がひどく短く、湾曲していた。長くかばっていたせいか足だけでなく全躰が歪んでいる。

しかし足の不自由などまるで無いかのように、頑強な精神をもって稲作農家として誰よりもよく働いたからか、むしろ彼の足腰は今でも若い者を負かすほど強靱であった。

事実、愛用の杖は歩行を補うものではなく、壮健といえども高齢の夫を氣遣う妻の願いで転倒防止のために白樺の木を自ら削り持ち歩くようになったものだ。

白樺の木は杖の材料として特に優れているわけではないが、印鑑を自分で彫るほど手先の器用な彼は日頃から好んで白樺の木を材料とした。生命力が強く災害後の荒地などでもいち早く根を張る先駆樹種の白樺に、自らの人生を投影させたのだろうか。

並んで歩く背広の老人は、今年喜寿を迎えたとは信じ難い若々しさであった。立っても座っても、歩く時も背筋がピンと伸びた姿勢を保つ

ている。これは若い頃から変わらぬ彼の特徴であり、なんと自宅でくつろいでいる時でさえ同様であった。

「私」といって緊張するの？」

今でも妻に冷やかされるが、いろんなものが真つ直ぐでないと気が済まない性分は尋常小学校時代の恩師の影響を強く受けたものであった。また教育者として常に教え子の視線を意識しているからだとも自覚しており、これには苦笑するほかなかった。

式典が始まった。

何人もの記者からカメラを向けられ来場者も少し興奮気味であったのか、なかなか着席が進まず予定時刻を少しだけ過ぎていた。四十がらみの、役員の中でも特に真面目そうな司会役の口上がついつい速まる。

「ただいまから、十勝岳爆発災害復興六十周年記念く三浦綾子作、小説『泥流地帯』文学碑除幕式をとりおこないます」

空気が澄んでいるせいかスピーカーから流れる声がよく通る。神社の横を走る国道二三七号線は、市街地を迂回し深山峠から南に抜けるバイパス工事の影響でいつもは大型の建設車

両がひっきりなしに往来し騒がしかったが、折よくこの日は午後から休工となっていた。

五十八年前の今日、十勝岳が大爆発を起し百四十四名が犠牲となる泥流災害を引き起こした。小説の題材となったこの大災害の犠牲者に対する黙祷がささげられたのち、万雷の拍手とともに真つ白な布が外され、小説の作者である三浦綾子本人の揮毫による「泥流地帯」の文字が大きく刻まれた石碑が姿を表した。

台座として使われている巨岩は当時「山津波」と呼ばれた泥流によって実際に山間部から数キロメートル押し流されてきたものだ。

題字の下にやや小さい文字で刻まれた小説の一節が朗読された。背広の老人は目を瞑り心の中でそれを追った。たまに朗読の声を追い越した。連載された新聞紙面や単行本で幾度も読み返し自らの記憶と重ね合わせた場面だ。幼い頃から拔群の記憶力を持つ彼はそのくだりを一言一句違わず記憶している。

朗読が終わると老人はさらに誰かを悼むように再び眼を閉じた。

文学碑建立期成会代表者の式辞に続き、来賓や役員が次々と紹介されていく。

青年団時代からの付き合いであり昨年まで町長を務めていた和田松工門、被災時に日新尋常小学校で勤務していた恩師・菊池政美元教諭、隣人であり復興を牽引した吉田貞次郎元村長の娘の清野てい、安井弥生姉妹――

さらに錚々たる顔ぶれが並ぶ。町の名士が勢揃いしていると言ってもいい。

式典は場所を移動して行う祝賀会との二部構成である。第一部となるこの除幕式は一時間に満たない予定であったため、来賓あいさつは割愛されていたが只一名、ごま塩頭の老人はずいぶん前から来賓代表としてのスピーチを依頼されていた。

だが、彼はそれを固辞した。

幼少期から親分肌であった彼は青年時代も年老いてからも人からよく頼られた。大勢の前で話す機会も多かったし彼の演説はいつでも人の心を強く打った。

当時を知る者は誰もが彼を吉田元村長に並ぶ泥流災害復興の旗手として認知していたし、何より、小説にモデルとして登場する英雄の言

葉を、誰もが聞きたいと思った。

\*\*\*\*\*

「英雄なんかじゃあ、ない」

自分が思ったとおりに行動しただけだ。自分勝手だったときえ思う。しかし小説が発表されてからというもの、多くの読者から感動を伝えられた。町民から感謝の言葉を聞かされた。マスメディアにも称賛された。その度に心の中でそうつぶやいた。

とはいえわざわざ否定して回ることもなかった。妻がそれを分かってくれていたからだ。

妻との結婚は容易なものではなかった。三歳下で幼馴染でもある妻は尋常科を卒業した秋に博打狂の父親によって売り飛ばされた。七年後ようやくそこから逃がすことにはもちろん難儀したが、後に牛太郎や博徒につけ狙われ、関係を完全に断つまで生命の危険を感じるころが一度や二度ではなかった。

また、二人とも子を持つことを強く望んでいたが、生きて逃れられたときえ僥倖であり望

むべくもないと思ってはいたが、解放された当初旭川の医院へ身を寄せていたこともあり、幾度か精密な検査を受けた。結果を告げる沼崎医師はいつも自分が悪いかのよう涙を流した。

しかし何よりも、家族や仲間に関われ貧しくとも心豊かに暮らした自分と、売られた先で筆舌に尽くし難い生活を強いられた妻とでは、七年という歳月がそれぞれに与えた変化はあまりにも異質なものであった。この違いが後々まで互いを大いに苦しめた。

自分が市街の飲食店に売られると聞かされた時、妻は今後一切の幸福を諦め、小石に想いを乗せて信頼できる幼馴染に託したという。それからは自らをひどく穢れたものと貶め、罪を背負い、あるいは諦観することどころか心の均衡を保ってきた。そんな妻にとって突然眼前に広がった外の世界、自由に新しい暮らしは喜びや希望よりもはるかに脅威が勝るのは必然であった。さらに、残してきた朋輩への慚愧の念も、雇主の強い怨恨と莫大な借金を夫にまで背負わせたことも、新たに生まれた自分の「罪」として妻の心を縛りつけ、凍えさせていた。そ

れに気づいたのは結婚して暫く経ってからのことだ。幼少期より想い続けた妻とようやく結ばれたことを喜び、ただ前へ、二人で明るい未来へ突き進んでいるつもりだったが——気がつくとも自慢の大きな背中の後ろで妻は下を向き震えていた。

それから改めて妻と向き合った。心の中で糸がきつく絡み合っていたのが妻だけではなく、あの日ただの一人も救えなかった己への憎しみを日々募らせていた自分も同じであることに気づかされ、激しく動揺した。複雑な糸をほどき互いの心を解放するのは簡単な事ではなかった。

結婚から四年の月日が流れ、ようやく心から笑い合えた、真に心が通じあったと確信し、本当の意味で二人の人生が始まるのだと実感できた頃、妻から懐妊を告げられた。妻の肩を抱き何か叫んだ後に膝から崩れ落ちたことまでは覚えてる。咆えるような大声でいつまでも泣きじゃくっていたことは、驚いて様子を見に来た吉田村長に後から聞かされた。

特殊な障壁を乗り越えてきたからこそ、妻への信頼は篤い。時間をかけ、互いの強さも弱さ

も、心の奥に燦る闇さえも理解し合ったかけがえない家族が自分を分かってくれているならそれでよかった。

ただ、喜寿を迎えた今なお少年のように目を輝かせ、嬉々として兄の武勇伝を——年月を経てかなり誇張された武勇伝を語り、英雄視する弟のことを思うとつい笑ってしまうのだが。

スピーチを頑なに断ったのはそうした、周囲からの評に対する違和感もあったが、いずれにしても、もう自分は役割を終えたという気持ちがあまりにも強かった。

これまでも災禍の歴史については語り続けてきた。それを次の世代に繋げることには、むしろ積極的にその機会を設け自分の使命として日々伝承に努めてきた。

小説を読んだ時、ようやくそれから解放される時がきたと思った。あの災禍が小説の題材として取り上げられたことは救いであったと心から思う。半世紀の歳月が多くの住民からその記憶を失わせつつあったことは明白だ。手元に配られた文学碑の建立趣意でも触れられていた。

——今では遠い過去の出来事として忘れ去られようとしています——

それだけは、だめだ。

戦後上富良野も急激な変化を遂げた。人口が急増、社会基盤も暮らしも近代化しモノが溢れるようになった。と同時に過去の惨事が語られる機会がめっきり減っていることに気がついた。大正時代の噴火災害を語れる者はもう自分を含めごくわずかだ。十年後の自分ではもうその役目が務まらない。

少なからず焦りがあった。しかし文学という形でその記憶が残されると知り心から嬉しかった。間に合ったのだ。

消えかかっていた被災当事者の生の声が拾われた。埃をかぶっていた研究分析の記録は三浦によって再び掘り起こされた。家族や先達から受け継がれながらも長い年月で薄れていた記憶を住民の心に蘇えらせた。

正統にわたる長編大作には自分が伝承しようとしてきたことをはるかに凌ぐ、文字数では測ることのできない膨大な記憶が綴られていた。自分があと何十年生きたとしても伝えきれな

い、最新のコンパクト・ディスク・システムでも収まりきらない記録が文学として世に残される。

量だけではない。作者三浦綾子の取材がどれほど緻密で膨大であったか。著述がどれほど正確であるか。

上富良野の郷土史とささえいえる物語が多く、読み手の心に刻まれ、繋がれてゆく。そしてまたどこかの書店の、あるいは誰かの部屋の書棚で次の読み手を待ち続けるのだ。文学作品に形を変えた記憶は連綿と読み継がれてゆく。

だからもう、解放されたのだ。

ようやく語り部としての役目を終え、今まで決して外に出してこなかった、自分の記憶に生き続ける肉親たちと向き合うことができそうな気がした。

かつては祖父と祖母、そして姉や妹の顔が、声が、ぬくもりが、共に過ごした日々が、両手からこぼれ落ちていった命が、必死に手を伸ばしても遂に届くことのなかった魂の一つ一つがいつも浮かんでは心をかき乱した。そのたび沸き上がる慟哭を必死で内に封じ込めてきた。いつしか、その身もだえるほどの悲しみは記憶の奥

底に封印された。そうしなければ声に出して語り継ぐことなどできなかったからだ。

だがそのおかげで半世紀の間、大切な記憶が色褪せず、誇張も欠忘もなく当時のままに心に留め続けることができたのだと、今ではそう感じている。そしてようやく、向き合うことができたのだ。

あと、四十年。

あの頃思い描いた「百年後の上富良野」に自分の姿はない。しかしもう憂いはない。

決して英雄などではないが精一杯、正直に生きてきた。ただひたすら、やるべき時にやるべき事をやってきたに過ぎない。しかし、積み重ねてきた如何なる苦勞も、誰かの、何かの糧となり記憶となりいつまでも生き続ける。それこそが、報いなのだ。なんと、報われた人生であつたらうか。

「じいちゃんは何でお日様にお参りするの？」  
いつか孫に問われ困惑したことを思い出す。  
かつて同じように朝日を拝んでいた祖母に、若き日の自分が「拝んでも拝まんでも太陽は照る

のに、何で拝む？」と問うたことを本人はすっかり忘れていたが、いつからか何にともなく自然と手を合わせていた。ただただ感謝の気持ち が表に溢れ出ていた。手を合わせる先は何だったよかつた。

日新の家で最後に餅をついた日。なぜあれほど過酷な日々、貧しい暮らしの中で祖父も祖母も心から満ち足りた笑顔をを見せていたのか、感謝に溢れていたのか。その理由が今ならわかる。

その壮絶な最期を悼み「報われない」と嘆く者もあつた。弟さえそうだ。しかし、祖父母の、じつちゃんとばっちゃんの人生は断じて「報われない人生」などではなかったと、今ならそう思える。

鎮魂の太鼓演奏が終わり、除幕式は閉式を迎えた。涙をぬぐう者もあつたが最後の記念撮影の準備に取り掛かると再び賑やかな歓談がはじまった。過去を語る者も、現在を語る者も、未来を語る者もいた。皆が思い思いに語り合った。そのどれもが笑顔だった。





## 『いつも心に拓一を part2』

(ペンネーム) 鵜飼鮎子



現在の時刻は九月三十日二十二時五十二分。三つ子の魂百までとはよく言ったもので、初めて本作で読書感想文を書いた小学校六年生の夏も、ギリギリまで宿題に手を付けていなかったことをふと思い出す。去年応募した泥流作文は自分なりによく書けたと思っていて、思いの丈を伝えられたので今年の応募は見送ろうと思っていた。三日前まで。そこから二日間書こうか書かまいか悩んで、今になってやっぱり書いておこう、と思った次第。子供のころは授業時間内で作文を書けていたし、いけるような気がする。拓一への愛をもってすれば。

私が人生の教科書に掲げている本は同じく三浦綾子作の『ひつじが丘』だ。定期的に読み返して自らを律している。でも、某SNSにて「#名刺代わりの小説十選」として挙げているのはこの『泥流地帯』である。なぜならば、この本は小学六年生の私に深い余韻を残したから。私の人格形成に一番強く影響したのは間違いなく『泥流地帯』で、この世で最も男前なのは拓一だから。

人は読書によって、自分の心を守る術を身に着けることができる。それはいわばワクチンのようなものである。世の中はなかなか理不尽で不条理だ。とてつもなく辛い現実につづかった時にひとは簡単に腐る。近年、ひとの心は腐りやすくなったように思う。自分史上未曾有の困難に直面したとき、私たちの心を守るのは、家族であり友達であり、これまでの経験で自らが立てた心のつかえ棒だ。私は、この心のつかえ棒を手取り早く増やす方法は読書だと考えている。私には、子供のころ石村一家が立ててくれたつかえ棒がたくさんある。だから、どうにも辛いときも、「あ、この困難は拓一が感じたアレだ」「この悔しきは耕作が感じていたソレだ」と思い出すだけで、私の心は励まされる。小さな痛みを覚えた時にふと前を向くと、少し先にいる拓一が振り返って、こちらを心配そうに見ていてくれる。そして私は一度は地面につけた両の掌を払って、また立ち上がることができるのだ。他人の辛い体験や思考回路を読書によって知ること、人は心に抗体を手に入れるのである。つかえ棒は多ければ多いほど良い。自分の心は守りすぎて悪いということはないはずだ。だって生きるのは案外大変で、そ

れでも人生は続けていかねばならないから。それは家族のためかもしれないし、友人のためかもしれないし、いつか来る未来の自分自身のためかもしれない。なんだっていい、でも生きていてほしいと私はまだ見ぬ人のために願う。

三つ子の魂百まで。読書で身に着けたワクチンだって百まで有効だ。若い皆には、たくさん本を読んで、たくさん心の支えを身に着けてほしいと思う。心に拓一が住んでいたら、人生は概ね無敵と考えて間違いない。どうか一人でも多くの皆さんが『泥流地帯』を読んで、心に一本でも多くのつかえ棒を立てられることを祈っている。

## 三浦綾子著『泥流地帯』に出会えて

——上富良野は奇跡の地——

松野 富子



昨年の五月、新聞の朝刊で『泥流地帯』の感想文募集を私は知った。上富良野町では、この小説を同時に映画化に向けて取り組んでいることが分かり深く感銘を受けた。

是非、私も応募をして、更に上富良野町について理解を深めたい——そう思った。

この『泥流地帯』は、著者の三浦綾子さんの作品であり昭和五十一年、続編の『続泥流地帯』は五十三年に北海道新聞日曜版に連載され、その後に新潮社から刊行されたとのこと。北海道出身の作家として三浦綾子さんの存在は、私にとって同じ道民として誇りである——さらに尊敬できるのは、その生涯で度重なる病の状況にあっても 크리스チャンとして「キリストを伝えること」をテーマに小説の創作活動を積極的に行き、数々の作品の中でメッセージ的なものが読者の私たちに投げかけられる。人生を生きる上で経験する「原罪」「苦難」「犠牲」などの要因である。

現在の私たちでも新型コロナウイルス拡大で

世界中の人々が、まさに苦難の中にいる。それでも諦めずに収束を願って感染対策を続けるしかない——。生きるために…。

本作品の『泥流地帯』では大正噴火といわれる上富良野村の十勝岳噴火災害（大正十五年）について史実に基づき人間の苦難をどう受け止めるべきか、が描かれている。

この小説のきっかけは、三浦綾子さんの夫、光世さんが旭川営林署に勤務していたことがあり、十勝岳噴火災害に関心が高かったそうである。光世さんの勧めによって執筆されたものだという。三浦綾子さんの創作活動は口述筆記で、常に夫の光世さんと支え合って行われていた。この作品では当時の史実を描くために、執筆前に三浦夫妻は「悲劇と奇跡の地」上富良野町を何度も訪れて、災害の痕跡を見て回り当時の被災者の人々から熱心に話を聞いたそうである。執筆の時に『泣きながら書いた』というエピソードを聞いて私は胸を打たれた。

こうして、まさに執念のような強い信念で取材を重ね『泥流地帯』は誕生した。

物語では、拓一が中心となり十勝岳の噴火の後、山から流されてきた流木や泥土で泥海と化した田畑でも復興に向けて諦めず、立ち向

かう——泥土の中から、木や石を取り除く作業を続け苦労して、奇跡の復興を果たす。

これは小説でありながら上富良野町の歴史で、実際に起きた自然災害である。三浦綾子さんは作家として強い使命感で開拓の歴史を執筆し後世の人々に伝えたい…と考えたのだと思う。あらためて私はこの作品に出会えたことに深く感謝をしている。

上富良野町を奇跡の地——と三浦綾子さんは、そう例えた。現在、上富良野町では映画プロジェクトが始動し、実写映画化に取り組んでいると知り北海道の道民として、さらに『泥流地帯』の読者として、この作品が映画化されることを楽しみにしている。

——奇跡の地（上富良野町）から遂に映画化——が近い将来、必ず実現する。そう強く信じているからだ。

今、「泥流地帯(正・続)」を

読み直し思うこと

(ペンネーム) 福島野百合



数日かけて「泥流地帯」の正編と続編を読み直した。犬の散歩に外へ出てふと、今まで見過ごしていた道の端に、九月末なのに桜が咲いているのに気づいた。季節外れの白い小さな花は、ごみの収集場所の横手に咲いている。汚れた場所でも可憐な花は、福子のように清らかだと思った。

私が、「泥流地帯」に出会ったのは二十一年前の冬。まだ就職して二年目で、懸命に仕事をこなしていた頃だった。キリスト教の洗礼も受けたばかりだった。拓一・耕作兄弟の苦難に負けず義しく生きる強さに、若い私は大変励まされた。そして、苦界に身を置く福子と、ひたすら福子を思う拓一の姿勢に深く感じ入った。

今回読み直した「続泥流地帯」で、硫黄を含んだ水田を復興しようと厳しい農作業に打ち込む拓一が、暴漢から耕作を庇おうと足を折られるシーンが、心に響いた。一生足を引きずる障害を負う拓一。何故?と問いたくなる。福子を愛し、一生懸命復興しようと全力で働い

たのに、こんな苦難を受けるなんて、何故ですか。

三浦綾子さんは書いている。

「しかし、正しい者に災があるのはどうしてもわかんねえなあ」「わかってもらえなくても、母さんの言うように、試練だと受けとめて立ち上がった時にね、苦難の意味がわかるんじゃないだろうか。俺はそんな気がするよ」

この拓一の「明るい声」に三浦さんの答えがあるのだ。決して甘い理想的な言葉ではない。

自らが十三年の闘病生活をして、愛する人との死別、多くの苦しい病を経てきた人の、控えめな思いやりのある配慮に満ちた言葉だ。

正しい者には災いが多い。しかし、その全てから神は人を救い出されると聖書にもある。私は拓一のように「明るく」は言えない。何故ですか?という問いが、胸に突き上げてくる。

人間は、全てを見通すことはできない限界のある存在だ。神様は何がその人にとって最善かを、よく知っておられる。不合理と見える苦難も与えられるが、意味も無く苦しめ悩ませることはない。愛なる神様は、私達が成長するために、悪い事も試練としてお許しになることもあるのだろう。

そして、苦難の中でも、私達は一人ではない。神様が共にいる。いっしょに苦しい道を歩き、重荷を担って下さる。苦しみを共に感じて慰めを下さる。私達の弱さを理解してこぼれる涙をぬぐって下さる。それが、十字架のキリストの神の愛である。私達の罪を一身に負い、裁きを引き受けて下さった方がキリストである。

拓一と耕作の母佐枝が言う、『神は愛なり』ってそのことだけを信じていたらい」との言葉。三浦さんは控えめに描いているが、その深さと重さを感じる。災いにあつて苦しむ時は、神様もまた苦しんで傍らに寄り添っておられる。そして、神の時がくれば苦難は大きな喜びへと変わる。十字架で死んで、三日目に復活したイエスの希望が満ちる。泥田に稲は実り、苦界から福子は解放され自由を得る。十字架と復活のイエスの希望こそ、苦難の道を耐え忍んで歩く者の慰めと力の源だと思う。

私は今回「泥流地帯(正・続)」を読み直して、自分に向き合い、神様に問うことで、心の中のわだかまりがより深い信頼へと変わったように思う。「試練だと受け止めて立ち上がる」が少しできた気がする。

さらに、「続泥流地帯」は災害からの復興も



詳しく描いている。全国各地で様々な災害が起こり、被害が出ている。福島在住の私は、十年前の東日本大震災と続く原発事故による、放射能に汚染された広大な土地のことが思われる。拓一らは、硫黄と硫酸の燃える土地を、二年で稲の実る水田に復興した。しかし、危険な放射能に汚染された福島のが、安全な土地になるのはいつのことだろうか？

私の家は、福島第一原発から五十キロ離れているが、庭の丹波栗の実の線量を計ると、百八十ベクレルを検出し、基準値百ベクレル以上なので食べられない。昨年は百三十ベクレルであつたのが、値が高くなったのが不気味である。同じ庭の柴栗は五十ベクレルなので食べている。災害からの復興を力強く描いた本書とその映画化は、人々に大きな希望を与えるだろう。上富良野町はきつと妙に美しい町であろう。十勝連峰に抱かれた豊かな大地がスクリーンから見られる日を、苦しみの中にある多くの人々の励ましとなる日を、私は心待ちにしている。

## 『泥流地帯』と心象の故郷

根本彩



子供の頃から読書好きで沢山の本を読んできましたが、自分が住んでいる北海道が舞台の小説には、特に親近感を覚えます。

中でも、つい先日読み終えた三浦綾子さんの『泥流地帯』『続 泥流地帯』(新潮文庫)には、不思議な懐かしさを感じました。年代は四十五十年ほど違いますが、農家に生まれた母子供時代の話の思い出したからです。

『泥流地帯』の耕作(モデルは三浦光世さん)は村一番の優秀な子供で、中学校を一番で合格したにも拘わらず、姉の富の嫁入りのために進学を諦めなければなりませんでした。

そして、耕作の高等科の担任である益垣先生は、市街の子供と比べて農家の子供を悪く言います。宿題をしない、遅刻する、居眠りをする……そして、「百姓というのは、学校の大切さを知らん。学問の大切さを知らん」(p.106)と。

しかし、叱られた井上権太は身体が弱い母親を助けており、碌に休む時間がないのです。更に、農家の子供は市街の子供がまだ寝ている

うちに家を出るけれど、学校が遠いから遅刻してしまうこともあるし、電灯がないから薄暗い石油ランプの灯影で宿題をしなければならぬのだと、耕作は心の中で益垣先生に反論します。

私の母も通学には徒歩で五十分かかり、家の手伝いで毎日忙しく、夜は夜で親に電気を消されてしまうので、勉強する時間も限られていたとのことでした。それでも努力して成績は良かったけれど、女子ということもあって親の許可が下りず、大学には進めませんでした。

また、『続 泥流地帯』の後半には、麦飯ですらない馬鈴薯の弁当を、新聞紙で隠しながら食べる生徒・土野精吉が出てきます。母の弁当は流石に白米でしたが、売り物にならない屑米や黄色い古米ばかりで、やはり隠して食べていたそうです。

更に言うなら、私が三浦綾子さんの作品を読むのは今回が初めてですが、母は昔から何十冊も読んでいました。今は父が『泥流地帯』を読んでいます。父も母と同じく北海道の農家の子ということもあり、耕作にシンパシーを覚えているようです。

私は『泥流地帯』を読みながら、母の実家の田畑を思い出しました。

家の裏手に畑が広がり、奥には田圃がありました。真ん中に道が通っていて、そこをずっと歩いていくと、羊蹄山に到ります。いつか山まで行ってみたいと思いつつも、そのままになってしまいました。

私は活発な子供ではなかったので、母の実家に遊びに行っても、家で本を読んでいることが殆どでした。ただ、澄んだ水を湛えていた田圃、土がよくならされた畑、何にも遮られない広大な青空、山の近くを走っていた列車は、今も目の前に浮かびます。

また、私は去年引越すまで、藻岩山のすぐ隣に住んでいました。以前の住居の記憶も空と結びついており、『泥流地帯』の世界と重なります。

どこまでも遠く青く、光り輝いているけれど切なくなるような青空。水分を含んだ雲に覆われ、物憂げに見える曇り空。よく見ると真っ黒ではなく、雲が微かに流れている深淵の夜空――。現実そのままではなく、過ぎた日を懐かしむ郷愁に彩られた光景なのかもしれません。

勿論、私の子供時代は、耕作たちが経験したような過酷なものではありませんでした。しかし、空が地球の裏側と繋がっているように、私たちが子供だった頃の空も、年月を超えて大正時代の空と繋がっている気がしたのです。

私にとっての故郷は、現実に存在した場所というよりも、記憶の中に存在しているのかもしれない。

『続 泥流地帯』では、遠足で深山峠に着いた耕作が、生徒たちに「ふるさと」について語る場面があります。

「いいか、よく聞くんた。自分たちのふるさとを胸に焼きつけておくということは、人間として大事なことなんだ。君たちはいつの日か、この村を離れて、ほかの町に住むようになるかも知れない。しかし、そこに楽しいことが待っているとは限らない」

生徒たちがうなずく。

「いや、つらい目に会ったり、苦しい目に会ったりすることが、多いかも知れない。そんな時にな、ふっとこの広大な景色を思い浮かべて、勇気づけられるかも知れないんだ。人間はな、景色でも友だちでも、懐かしいものを持つてい

なければならん。懐かしきで一杯のものを持っていると、人間はそう簡単には墮落しないものなんだ」(p.403-404)

耕作は子供の頃に見た景色だけでなく、人への愛情や純粋な気持ちを忘れないでほしいと言いたかったのでしょう。

私が墮落しないでいられるかは分かりませんが、子供の頃に見た田畑や青空を思い浮かべると、心が身体から抜け出て、心地良い空気の中で休んでいるような気分になります。

心の中の故郷であれ現実の故郷であれ、人は「ふるさと」を思い浮かべること、自分を見つめ直したり、活力を得たりできるのでしよう。刹那的に生きていけると、過去を振り返る余裕もなくなりがちです。そういった意味でも、「ふるさと」を忘れないことには意義があるのでしよう。

ところで、『続 泥流地帯』の終盤、災難に遭うのは日頃の心がけが悪いからだと考えてしまう修平に対して、拓一はこう言います。

「叔父さん、俺も昨夜そのことを、病院で耕

作に言われてき。はっと思ったんだよ。現実  
決して善因善果、悪因悪果じゃないんだなあ。  
そうあって欲しいんだけどさ」

「ふーん」

修平は不得要領の顔をした。

「それはねえ、人間の願望に過ぎないんだよ。  
理想に過ぎないんだよ。悪い奴は亡びてほしい。  
いい人間は栄えてほしい。そういうもねがつてい  
るうちに、悪いことがあれば、何の罰とか、い  
いことがあれば精進がよかったとか、そう勝手  
に思うようになってしまったんだよ、きつと」  
(p.500)

現在は不幸な目に遭ったからといって、「心  
がけが悪かったからだ」「仏罰だ」「先祖の祟り  
だ」と言われることはあまりないでしょう。

しかし、公正世界仮説というものが存在しま  
す。

この世は公正なのだから、良いことは報われ、  
悪いことは罰せられるという思い込みです。

その考えに基づいて善行をするだけならいい  
のですが、容易に被害者非難や自己責任論に  
繋がってしまうという問題があります。理由も  
なく不幸な目に遭う人は滅多にいない、トラブ

ルに巻き込まれるのは、本人に何か落ち度があ  
ったからだと考えてしまうのです。

そういった意味でも、『泥流地帯』のメッセー  
ジは今日でも生きていと言えます。

私は苦難を神が与えた試練だと思うことは  
できません。ですが、自分を責めずに、結果だ  
けを重視せずに生きるのを良しとすることで、  
救われる人がいるのは確かでしょう。たとえ復  
興が叶わなかったとしても、拓一は自分の辛苦  
を後悔せず、宝物としたはずです。

泥流に覆われた地が美田となって今に続いてい  
るように、『泥流地帯』はこの先も末永く生き  
続け、数多くの人々を照らしてくれるでしょう。



# 児童生徒の部

## 泥流地帯への思い

(ペンネーム) フルーツ娘

私は、高校に入り初めて泥流地帯を読みました。これまでは、この本の存在は知っていたのですが、読んでいた人の話を聞いているとあまり得意ではない分野の物語だったので読んでいませんでした。ですが、国語表現の授業を選択して泥流地帯の本を読むことになりました。

実際に読んでみての感想は、私達が生まれる前に開拓が始まり、噴火が起きてから復興までの大変さに驚きました。それも、私達はまだ一度もこのような災害を経験していないので、この怖さを少しも知らなかったのですが、この本を読むことで泥流の怖さを少しでも知ることが出来ました。

泥流が流れてくる前の生活は、父を早くに亡

くし、母は美容師になるために札幌に行き、拓一と耕作そして良子は祖母と祖父に預けられていました。決して楽ではない生活の中でも拓一たちはそれなりに、三目ご飯を食べたり、山ブドウを摘んだり、お年玉をもらって買い物に出かけたりして人生を楽しんでいました。でも突然起こった十勝岳噴火により、その家族の祖母と祖父と良子が泥流に流され死んでしまいました。そういう災害に遭っても、立ち上がって頑張る姿に感動しました。この本を読んでよかったと深くそう思いました。

## 泥流地帯の感想

(ペンネーム) ずんだ餅

生まれ育った上富良野にこんな歴史があることを知りとても驚きました。

先人たちの苦労や努力、どんな困難にも諦めずに立ち向かい対処していく姿がとても印象に残っています。特に拓一のくじけない意志が心にとでも残りました。

特に心に残った場面は「実りのある苦労なら誰でもするさ。」と拓一が発言したところです。報われることのない努力を人生における一つの宝だと考え、その考えで行動することができることにとっても驚き、感動しました。

私も、結果にとらわれることなく過程やその方法をよく考えて生きていきたいと思います。

この本を読んで私は、災害の恐ろしさと災害に立ち向かう人間の強さを改めて考えることが出来ました。

日頃から自分の近くで起こりうる災害をしっかり調べて、起こった場合どのように対処すべきか決めておきたいと思います。

## 泥流地帯についての感想

安藤 玲梨



泥流地帯を読んで思ったことが、二つあります。まず一つ目は噴火までの話がとても長いことです。噴火のシーンは泥流地帯の最後の方です。私はいつ噴火するのかドキドキして読んでいました。まさか噴火までがこんなに長いとは思いませんでした。登場人物の子どもの頃から始まっていて、耕作が十九歳の時に噴火が起って、人がたくさん死ぬところを目の当たりにするのはとてもつらいし、トラウマになりそうと思いました。けがの詳細もリアルで、よくそこまで表現できるなと思いました。私だったら、思い出ただけで気持ちが悪くなりそうです。

二つ目は登場人物にかわいそうな子どもが多いことです。例えば、節子は決められた人と無理矢理結婚させられそうでした。本当に好きな人と結婚できないのは、つらいことだなと思います。花井先生に泣きながら「お嫁に行きたくない」と言ったシーンは私も泣きそうに

なりました。私が節子だったら、耐えられないと思いました。節子だけではなく、他にも親と一緒に暮らせないことや、お金がないことや学校に行けないなど、かわいそうな子どもがたくさん出てきました。昔は今では想像できないような暮らしがあったことがわかり、今と昔の時代を比べながら読むことができました。

私は、泥流地帯を生まれて初めて読みました。見どころは、噴火の悲惨さはもちろんですが、自然現象や開拓の大変さだと思いました。上富良野の歴史としてぜひいろんな方に読んでもらいたいです。

## 泥流地帯を読んで

広瀬 永真



わたしは生まれ育ったこの上富良野町がどのような経緯でできたか、どのような歴史があるのかなどは全く知らなかった。しかし、三浦綾子さんの作品『泥流地帯』を読んで上富良野の歴史を少しは知ることができた。

歴史以外にも人の温かさや人の嫌な部分も知ることができた。頭がよい耕作は中学受験しようとするも、家族のみんなに迷惑がかかると思い中学受験を自分から辞めるという判断をした。この判断はなかなかできるものではないと思う。前に深城という人に家族を馬鹿にされたときに本気で怒っている描写もあった。耕作は心から家族を愛している人だと思う。

他にも、泥流に飲み込まれた家族を拓一が泥流に飛び込んで助けに行くということもしていた。さすがにこれにはびっくりしたが、同時に家族への愛情を感じることができた。

## 泥流地帯の感想

太田 朋香



泥流地帯を読んで思ったこと、感じたことはただただ辛い、ということでした。上富良野で生まれ育ち、必ず耳にしたことのある「泥流地帯」を授業で読みました。

高校一年生の時に地域を知る授業で町内を巡り、その終わりに十勝岳噴火の短編の紙芝居を見せてもらいました。その中で女の子が泥流に流されている場面がありました。今回授業で先生が小説を読んでくださった時に私はその女の子の絵を思い出して、その子が福子だったのではないかと思ったり、自分の中で繋がった感じがしました。

小説を読んだ後、実際に自分たちがそれぞれの登場人物になりきり演じるということをしました。初めは上手にできるのか不安でしたが、演じてみてもっとその人物に同情する気持ちが湧きました。その人物が悲しそうに話すところは自分も悲しくなったり、楽しく、幸

せそうなきは自分も嬉しくてつい声が元気になったりしました。周りの皆も最初はめんどくさそうでしたが、回数を重ねるにつれて感情が入り込んで、皆とてもいい演技でした。

今では、自分でも明らかに分かるくらい登場人物に愛着が湧き、泥流地帯を知る前より好きになりました。もっと話を詳しく聞きたい。もっとまたいろいろな場面を皆と演じたい。そう思うようになりました。

ですが、愛着が湧いたことにより話を読み進めるうちに辛い気持ちになりました。泥流の現場が上富良野ということとても親近感が湧くので、もし自分がこの子たちの立場だったらと考えるととてもリアルに感じ怖くなりました。私がこうして泥流地帯を深く知ることができたのは授業のおかげ、つまり学校のおかげです。そんな学校にも行けない登場人物達が可哀想で辛いです。学校は勉強だけではなく、人間関係を学び、将来どこで働いていくのかなどの人生計画を立て、学校で出来た友人との思い出作りなども出来るため、より良く生

きていくには学校という場所に通うことが大切だと私は思います。勿論、ご飯やお金がないことも辛いことですが学校に行けないことが一番辛いと思います。私は自分が学校に行っていない人生など考えられないので、こういう風に登場人物の皆がこれらのことを学んできたのか気になります。

端から見ると辛い生活の中、拓一たちが楽しそうに生きているのを見て、私は幸せとは何だろうと考えてしまいました。

## 泥流地帯と私と母

(ペンネーム) レモン



まず、この小説を読んでいて思ったのは、拓一のお母さんが子供四人を置いて札幌に出ていくということに驚きました。自分の夢のためと深城が言い寄ってきたからといって、置いていくのはかわいそうだと思います。

耕作は、噴火のあと自分達の前で泣くことのない母をひどく不満に思っていて、責めたい気持ちがあるのは当然だと思います。自分だったら、耕作のように心にとめないで、責めたい気持ちを母にぶつけてしまうかもしれません。

そして、夜中に母が縫物をしていて声を立てずに泣いている場面が出てきました。それは、耕作や拓一の前で泣くまいとして座を外したり、富や良子のことにはふれまいとして、口を閉じていたりしたのです。そのことを耕作が知って、詫びたい気持ちや泣きたい気持ちになったというのを読んで、自分も母とちよつとした

ことで喧嘩になった時に、そういう気持ちになることがあるのでとても共感できました。

私は、総合探求の授業で十勝岳噴火の話聞き、上富良野がひどく泥流にやられていたということを知り、とても驚きました。それを基にした「泥流地帯」という本を読んでみると、その時あったかもしれないストーリーが細かく書かれていて、ということがあったのか詳しく知ることができました。大正時代の話ですが、耕作とお母さん、私と私の母の感情や気持ちに似ていたので、時代が違っていても繋がりはあるということがよくわかりました。

## 泥流地帯の感想

北條 愛夢



私は国語表現の時間に、泥流地帯についての授業を受けました。そこで、泥流地帯についての作文を書くことになりました。五人一グループを作り、台詞を読み、出演しました。そこで私は、登場人物の一人である拓一を演じました。そこで、拓一がメインの感想を書きたいと思います。

最初の場面では、とても真面目で、頑張つて米を売らせようとする努力家だと思いました。失敗してもいいからやろうとする姿が素晴らしいです。

しかし、途中の場面では、足を痛めてしまい入院してしまうことになりました。そこに福子が見舞いに来ました。拓一と福子は両思い。それなのに、福子は拓一との恋愛を拒否しました。もしここで、福子と拓一の恋愛がうまくいけば付き合いからの夫婦になると思いました。そこで、福子の本当の気持ちを考えた節子は、福子を旭川へ連れ出そうとします。最後は福子の気持ちを考えるのが良いと思いました。



## 泥流地帯を読んだ感想文

高校生 01



私は泥流地帯、続泥流地帯を読んで思ったことが沢山あります。

最初に十勝岳が舞台ということもあり上富良野の地名が多く出てきていて、他人事ではないような感じがしました。地元の読者をこの作品に引き込むような工夫がされているように感じられました。

その他にも火山の噴火や泥流などいつ起きるか分からない自然災害に着目することによって、災害を経験したことがないような人にも災害の脅威を知らせることができるとても良い作品だと思います。

次に大正時代を舞台にしたに作品ですが、キャラクターの心情やその時の考えなどが多く表現されており、緊迫したシーンや少しホッとするようなエピソードを挟んだ中で状況が目まぐるしく変化するため、とてもいい作品になっていると思いました。特に十勝岳が噴火して泥

流が流れ込むシーンはとても緊迫した状況が伝わってきて印象に残っています。

そのため今の私たちがこの作品を読むことで、いろいろな人との関わりや人を思いやる行動などをする点にとっても心が揺さぶられると思います。その中でも私は拓一の優しさや勇敢さなどに感動しましたが拓一が泥流に飛び込むシーンは判断ミスだと思いました。そのうえで作者が泥流に飛び込んだ拓一を物語上で生還させることによってどんな効果が与えられるのかを読者一人一人が考えてみるのも面白いかもしれません。私には、拓一を生かすことで、耕作や節子や福子とのストーリーをつなげようとしているのだと感じられました。

## 泥流地帯を読んで

山田 大和



初めて泥流地帯を読んだのは中学生のときだった。そのときは理解できないこともあったが、今高校生になって読んでもやっぱりよくわからない。物語に大きい盛り上がりがなく、山が爆発するまでが長過ぎると思うのだ。

だが、この本のいい所もある。それは、山が爆発してからだ。その場面は、泥流が流れてきて昔の人たちの苦労や悲しみを知れたからだ。

授業で泥流地帯の、ドラマを作った。そのときに感じたことは、どうしたら見ている人が分かりやすく見られるかを意識しようということだ。具体的に何をやったかと言うと、拓一が入院したときの場面では、机を並べて拓一役の人に机に寝てもらい病院のベットに見立てることで、どんな場面が分かりやすくした。その結果、見ている人が理解できやすいドラマになったと思う。

## 泥流地帯を読んで

(ペンネーム) 高校生 02



私が泥流地帯を読んで思ったことは、昔の北海道は、今ではとても考えられないほどにひどかったということです。

拓一や耕作は小学生のころから大人と同じような仕事をさせられていてつらそうでしたが、福子はそれよりもつらいであろう淫売の暮らしをしていて読んでいて気持ちがモヤモヤしました。

自分が生まれ育った地域の近くで、昔こんなにもひどいことになっていたなんてこの本を読むまでは思いもしませんでした。それに、噴火自体だけではなく、その後の、復興にもお金やたくさんの人の労働力が必要だったことを去年のフィールドワークで知りました。

それだけの大変なことがあったのに、今ではきれいな自然や町並みで、とてもそんなことがあったとは思わせないのが素晴らしいなと思いました。

私がこの本を読んで特に怖いなど感じたのは、やはり泥流で妹の良子、祖父の市三郎、祖母の

キワが流されてしまったシーンです。さっきまで近くにいた人が一瞬で消えてしまうところを想像するとゾッとします。

ここ最近では、もう少しでまた十勝岳が噴火するという話があるので人ごとではない感じがしました。

今では技術が発達し、GPS、地震計、監視カメラ、空振計などを使うことで火山がいつ頃噴火するかなどの情報をいち早く伝えられるようになっていきます。そして万が一噴火した時に備え、十勝岳の近くや各家庭にハザードマップが用意されており、避難グッズなども配布されています。そしてハザードマップにはありとあらゆる避難経路が記載されているので、事前に確認しておくことでより安全な経路に行くことが出来ます。

私も上富良野の高校に通っているので、この機会に避難経路をハザードマップやホームページなどで確認して、実際に噴火が起きてもできるだけ冷静で完璧に対処できるようにします。

## 泥流地帯を読んでみて

村上 凜



私は、高二になり、初めて「泥流地帯」という本を知りました。あらすじは、大正十五年五月、十勝岳が大噴火し、突然の火山爆発で、家も恋も何もかも泥流が一気に押し流していきます。上富良野の市街からさらに一里以上も奥に入った日進部落で、貧しきにも親の不在にも耐えて明るく誠実に生きている拓一、耕作兄弟の上にも、泥流は容赦なく襲いかかる物語です。(解説参照)拓一は福子のことが好きで、福子は耕作のことが好きで、節子も耕作のことが好きで今後どうなるかという話です。

読んでみてわかったことは、拓一は最初、暗いところが苦手です。外に出るのを怖がっていましたが、泥流に飛び込む勇氣がある人です。そして、福子のためにお金がないのに貯めているのが優しいなと思いました。お金がない拓一と耕作は、米だけを炊いたご飯は盆と正月とお祭りか葬式の時にしか食べたことがないと書いて



あり、普段は何を食べていたのかなと思いました。福子は、貧乏でお父さんは酒飲みで借金のかたに福子を売りました。耕作が街に出て節子に会い、耕作は驚いてお金を落としてしまい、みんなで五銭ずつ貸してあげるシーンがありました。どの子も貧しいのに優しいなと思いました。ですが、福子は五銭しか持っていないくその五銭を耕作にあげたのが、優しさなのか愛なのかどっちなのかなと思いました。自分だったら、あげるので愛だと思いました。

# もしもの世界

(ペンネーム) 山羊 鎌足



福子は最近、ある人について困っていることがある。先輩である拓一だ。彼は学校ではかなり有名だ。顔はオオカミのようにキリッとしていて、見ているだけで吸い込まれそうな瞳をしている。女子からはかなりの人気があるようだ。まさしく美青年という言葉が当てはまる、イケメンのお手本のような人だ。

実をいうと、福子と拓一は幼馴染なのだ。学校でこの二人が幼馴染だと知っているのは、もう一人の幼馴染の耕作と拓一と福子だけなのだ。ちなみに耕作も拓一に次いで、学校の人気者だ。男子からも女子からも支持を得ている。ついでに福子の説明もしておく、一言でいえばアイドルだ。とは言っても、男子からではなく女子から、可愛がられている。要するに、小動物のようにかわいがられているようで、女子が男子から福子を遠ざけるのに必死なぐらい、愛されているのだ。

とにかくこの三人は昔は、生き別れた自分の家族かといわれるぐらい仲が良かった。どこへ行くにも三人一緒に、逆に一緒ではない方がおかしいくらいだった。だが、現実とはそこまで甘いものではなかった。拓一が親の都合で違うところへ行ってしまったのだ。拓一が違ふところへ行っても耕作と福子は一緒だったが、またもや現実を突きつけられた。耕作の両親が事故に合って亡くなってしまったのだ。その成り行きで耕作は親戚のところへ預けられることになった。福子は一人になってしまった。

それから、数年の月日が流れたころだった。なんと福子が転校することになった学校に、拓一と耕作がいたのだ。最初、福子は、本当に現実なのかとその事実を受け入れることができなかった。だが、耕作は一目見ただけで耕作だとわかるぐらい、全然変わっていないかった。もちろん、悪い意味ではないのだが。向こうも福子に気づいて話しかけてきた。

「福子？福子なのか。」

「うんそうだよ。福子だよ。」

「そっか……夢じゃあないんだな。」

耕作も少しだけ混乱していたが、話しているうちにそんなこともなくなった。耕作は親戚のところへ預けられた後のことを話してくれた。親戚とは言っても、かなりの頻度で会っていたから仲は結構よかった。最初は事故のショックで心を閉ざしていたが、時間がたつにつれてゆっくりとだが、何とか両親の死を乗り越えられた。親戚の人たちのおかげでもある。それから、親戚の家が店をやっていたので手伝いなどをしていたらしい。

耕作はそれからの出来事をもっと話したがっていたが、福子にはそれよりも気になることがあった。

「それより拓一君は？」

「えつとな。そのことなんだけど……。」

「どうしたの？」

「あいつな。なんか……変なんだよ。」

「変って？」

「俺も最初はびっくりしたよ。拓一がいるなんて知らなかったし。だから、話しかけてみたん

だよ。」

「うん。」

「そしたらあいつなんて言ったと思う。『誰？』なんて言ったんだよ。初めはふざけてるのかと思ったんだけど、明らかに俺のことを知らないって感じだったんだ。」

「……。」

福子は思った。そんなはずはないと。昔はあんなに仲良しだったのに、拓一がそれを忘れているなんて。そんなことあるもんかと福子は思い、「私、拓一と話してくる。」

「おい！ちょ待てよ！」

耕作は何かを言っていたが、それも気にせず福子は走り出した。福子は走っていたが、曲がり角に差し掛かった時、人の影が見えた。危ない！そう思ったがその影はぶつかる瞬間にひらりと身を躲した。

「すみません！」と福子が言い、再度駆け出そうとしたが、腕をつかまれてしまった。福子はぎよつとしたが、自分に非があるので怒られる覚悟はした。しかし、福子をつかんでいる手は

すぐに離れ、

「気を付けるのよ。」

とだけ言い、相手の人は去っていった。何が何だかわからなかったが、用事を思い出し、また走り出した。その後ろでは、先ほどの人影が不敵な笑みを浮かべていた。



【Twitter(ツイッター)】

多くのユーザーに利用される SNS(ソーシャルネットワークサービス)のひとつで、140文字以内の短文(つぶやき=ツイート)投稿による高い拡散性が特徴です。『泥流地帯』作文コンクールではこの機能(アプリ)を利用した投稿も審査対象として募集しています。



橋宮香也子(三浦綾子『果て遠き丘』は電子書籍 or 三浦綾子記念文学館限定販売)

@KayakoHashimiya

三浦綾子『泥流地帯』実写映画化と同時に、三浦綾子『果て遠き丘』も実写映画化されて同時上映されますように。



ぬんぬこ

@nun\_nukochi

拓一と耕作、足して2で割ったような男が身近にいる。昭和3年生まれの祖父だ。戦争、復興、高度経済成長、バブル崩壊、震災、疫病 業のフルコースを生きる祖父に人の在り方を模索し体現する石村兄弟とその時代背景を感じたのは至当であろう。



ばさん

@basaaan\_mini

何者でもない者にも人生があり、大切な家族や仲間がいる。夢もある。それらが一瞬で壊れてしまうことがある。『正しき者には苦難がある』市三郎の言葉に、人生のままならなさ生き残った者のエールを感じた。全てを失っても信念は残る。発行から40年以上経っても色褪せない名作。



葵杏

@eustoma56

生きるほうがつらくむずかしい。つらいことなど好きでもないのに、いつも死ねない。私の血肉が邪魔をする。黒い土、誰かの汗、まだ見ぬいのちがつくってくれた。思いが邪魔をする。生きなければならぬと、身体じゅうが知っている。心は塊ではない。生きよと騒ぐのは血潮である。



Tomomo

@tomomo\_journal

【初めての取材】小2時、『家ぞくのれきしを聞きましょう』と宿題が出て、ストーブ上に並ぶ干し芋を見つつ、編み物をする祖母を訊る。北海道にいたとき山が噴火してな、せっちゃん一晩見つからん。次の朝よう生きてたと皆で喜んだよ。わたしのいまはあの夕刻が始点。ありがとう。



チーズ

@serv\_law

小説の中盤までそれぞれの生活や成長などが描かれ、背景が分かっていたからこそ山津波によって大事なものが一瞬で失われてしまった時の喪失感が大きい。終盤から読むのが辛くなり読み切るまでに時間をかけてしまった、前に進もうとする登場人物それぞれの生き様が心に残った。



野西満江

映画に出演される俳優さんが、泥流地帯にマッチする土の香りが似合う方を妄想いたしました。大竹しのぶさん、横浜流星さん、北村匠海さん、が素敵だと思います。映画の成功期待しております。



マ二郎

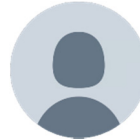
@balibalimassachusetts

”なりたい者になったらそれが成功者だ” 市三郎が示した”報い”の本質。土と闘う者として、教育者として、命を受けとめる者として”成功”の手がかりを見つけた3人、初めて”なりたい自分”を追い求める権利を得た福子。泥流地帯は胸を張り前に進む若者4人の開拓譚なのだ。



もちもちも

泥流地帯はメインの『泥流』が出てくるのが最後の方で、まだかなと思いながら読み進めていたらいつのまにか最後まで読めた。この本には人を夢中にする何かがあるのかもしれない。拓一の行動力ものすごい。自ら泥流に飛び込み、それなのに死なない拓一は化け物だ。



かつば

一番印象に残ったのは福子で、みんなから可愛がられていたけど売られてしまい、かわいそうだった。福子が耕作に白い石をあげたのは耕作のことが好きだったからだ。その白い石を耕作はずっと持っていた。それがもし自分だったら嬉しいので福子もきっと嬉しかったと思う。

## 資料編

## 史実としての『泥流地帯』

小説『泥流地帯』が誕生したのは作者三浦綾子さんの夫であり口述筆記のパートナーである光世さんがきつかけでした。三浦夫妻の住む旭川と上富良野は一時間足らずの距離。近郊での出来事でもあり営林署勤務時代から関心の高かった十勝岳噴火災害について、聖書に記されるヨブ記になぞらえ、人間の苦難をどう受け止めるべきかをテーマとした作品の執筆を綾子さんに勧めたそうです。

執筆にあたり三浦夫妻は「悲劇と奇跡の地」上富良野町（被災当時は上富良野村）を幾度も訪れ、災禍の痕跡を巡り当事者から熱心に話を聞きました。執念ともいえる取材の果てに作品に織り込まれた現実の「上富良野」と「十勝岳噴火災害」についてご紹介します。



## ■上富良野町（上富良野村）

上富良野町は北海道中央部、十勝岳をはじめ三方を山々に囲まれた盆地に位置する人口約一万五百人の町です。

入植開始は明治三十年。三重県の団体が草分地区（物語中、吉田村長や移転後の石村家があった地域）に足を踏み入れたことが始まりです。

初夏を彩る町花ラベンダー、盆地特有の甘み広



るメロン、ビール原料となるホップ、全国のホテルやレストランで愛されるブランドポークや和牛などの豊かな農畜産物、そして道内最高標高、雲上の温泉郷や色鮮やかなパッチワーク丘陵など、広大な火山地帯特有の、大自然の恵み豊かな地域です。

## ■活火山、十勝岳

十勝岳（上富良野町ほか／二〇七七m）は大雪山国立公園南部、十勝連峰の主峰です。日本百名山に名を連ねる秀峰であり、富良野岳、上富良野岳、美瑛岳などを巡る登山コースは多くの登山客で賑わいます。連峰ではもともと若い（新しい）山ですが、現在も数十年おきに火山活動がみられる活火山です。

## ■大正噴火（大正十五／1926年）

豊かな恵みを楽しむ一方で、大自然は時として人知を超えた脅威をもたらします。

物語の題材となったのは大正十五年五月二十四日夕方に



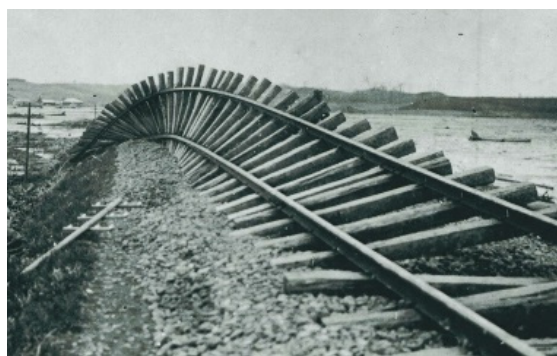
起きた十勝岳の大規模な爆発です。山体崩壊とともに溶岩や熱せられた大量の地下水などが噴出し積雪を融かし、土砂や流木を呑み込みながら泥流となって麓の村を襲いました。







【写真①】 泥流に押し流された巨岩(草分地区)



【写真②】 捻じ曲げられた線路(草分地区)

泥流の威力は凄まじく、七十トンに迫る巨岩が旧石村家よりやや下流まで流されました【写真①】。現在この巨岩は記念碑の土台として爆発記念駐車公園に設置されています。

さらに泥流の威力を象徴するのが捻じ曲げられた線路です【写真②】。作中にもあるとおり線路の土盛りはひととき高く、泥流の勢いを大きく弱めたとされています。

鉄路の損壊は著しいものでしたが復旧の勢いも凄まじく、被災翌日から数百人の工夫が動員され、四日後には貨客を満載した列車が仮運行されました。これにより各地から支援物資や救援隊が押し寄せ、応急処置のみならず復興の動きが大きく加速します。

また、作中で描かれるとおり田畑の復興作業は困難を極めました。1メートルを超える泥土に埋まったかつての美田には、近隣の丘や被災を逃れた農地から土を運搬し、上に敷き詰める「客土」という方法がとられました。さらに強い酸性の土地を中和し作物が芽吹く土に改良するための作業が何年も

続けられ、ついに耕作が「死んでいる」と嘆いた泥海に再び青々とした稲を根付かせることに成功しました。

現在の上富良野の、豊穡な稔りと風光明媚な景観は拓一や耕作が思い描いた「百年後のふるさと」そのものです。

## ■石にかじりついても

～ 上富良野村長 吉田貞次郎

物語に登場する吉田貞次郎村長は実在の人物であり、拓一や耕作らとの会話などを除き、作中では実際の言動や自身を巡る出来事などがリアルに記されています。

吉田村長は三重県一身田村(現津市)に生まれ、十六歳で家族とともに北海道に渡りました。二十五歳から村議会議員などを歴任し、大正八年、三十四歳で初代村長(一級町村制)に就任し、四期十六年に渡り近隣に名を轟かせる名村長として村政をけん引しました。

奇跡と称される泥流災害からの復興を果たした後、昭和十七年の衆議院議員総選挙で初当選。衆議院議員を一期務め、昭和二十三年、六十三年の生涯を閉じました。



吉田貞次郎村長

## 〈参考文献〉

『十勝岳噴火泥流災害90年回顧誌』『郷土をさぐる (第三号、二十号)』(上富良野町郷土をさぐる会)ほか



表紙写真【俵会議(たわらかいぎ)】

大正15年6月1日、公職者(上富良野村や北海道、警察、郵便局、報道機関など)による第一回の復興協議が行われました。駅前の倉庫に集まり俵(土木用と考えられます)に腰かけたことからこの公職者協議会を指して「俵会議」「俵評定」などと表されます。

※上富良野町郷土館所蔵写真に AI によるデジタル彩色処理を行っています

第2回『泥流地帯』作文コンクール作品集

2022年1月発行

発行:『泥流地帯』映画化を進める会

事務局 北海道空知郡上富良野町大町 2-2-11

上富良野町企画商工観光課内